

J 3.00

\* SHORYU (game book), Feb. 1945

67/14  
C



田中

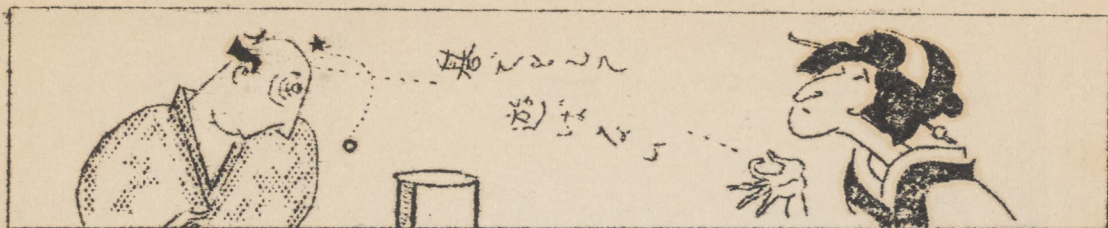
棋

昭和二十年  
二月號

友







棋友二月號目次

實戰に臨んで

頁一

置碁定石

頂行定石

頂抑定石

頁二七

互先定石

一間高掛り(一間夾み返し)

頁四七

碁人愚話

秀榮と殿様の懸賞

頁六十九

頁七十一

棋士銘々傳 八段鈴木爲次郎

頁七十三

詰碁解説

頁七十九

詰碁問題

頁八十一





日本の黎明！

あらゆる方面での

充實と強化と、さうして

世界的進出！

棋道もその波に乗つて

進んで行きたい

湖嶺鶴

友棋

全友棋

號月二



# 実戦に臨んで

## 捨石と劫の活用

### 一 捨石の意味と活用法

戦術の極意は捨身の戦法にあります。この極意は獨り軍事戦のみならず、人生の戦ひに於ても同様で、身を捨ててかゝるところに意外の力と熱が溢れ出るものであります。俚諺に「身を捨てゝこそ浮かぶ瀬もあれ」といふことがあり、柳生流極意の歌といふのにも「打ち下す劔の下ぞ地獄なれ身を捨てゝこそ極樂もあれ」とあるのは、要するに捨身の戦法を説いたもので、捨ててかゝることが如何に偉大な効果を生むものであるかを説いたものに外ありません。

碁の戦にもこの捨身の戦法が其儘適

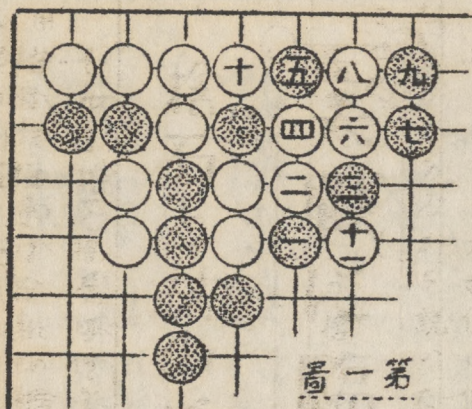
用されます。が碁の捨身は必ずしも自分自身が捨身でかゝるばかりでなく、貴重な味方の将卒を犠牲にして、その結果顕著な効果を擧げようといふ場合も含んで居ります。併し、自分自身が捨身でかゝるのも味方を犠牲にして捨身でかゝるのも、廣い意味の捨身の解。彼から云つて全く同じであります。彼の肉弾三勇士は個人的に見た捨身の戦法であると共に、國家的にみて我が日本軍の捨身の戦法であると云へます。

碁の捨石は即ち捨身の戦法の一表現で、野球の犠牲打と同じ意味を含んだものであります。この捨石が巧みに活用出来るやうになれば、碁も筑碁の域を脱したもので、立派な碁客と云ふことが出来ますが、實際には捨石の活用ほど口に云ひ易く行ひに難いものはありません。特に初心の間は捨石どころか、一子でも提られることが惜しく多くは「一文惜しみの百知らず」の愚を敢てするのであります。



それなら、捨石は何ういふ場合に應用すべきものか。その捨石に依つてどれ程の利益を受けるものか——といふことは、實際問題として直ぐ諸君の頭へ疑問がピンと浮かんで来るであらう。蓋し捨石の問題はこの二問題の解決にあります。

捨石は地域を占領し、勢力を張る布石時代にも應用されれば、死活を争ふ実戦時代にも應用される活用範圍の極めて廣いもので、第一番は黒(五)を捨石としたもので、巧みに白を封鎖して雄大な外勢を張つた実例であります。

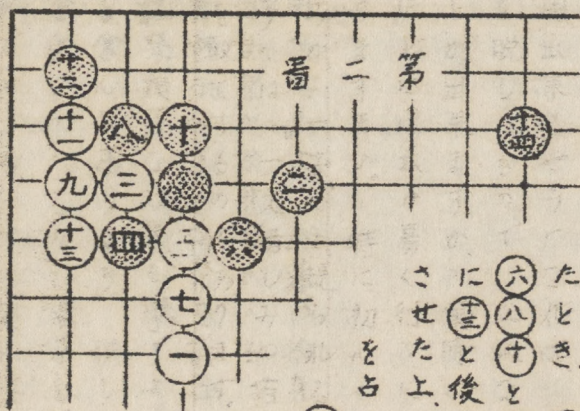


第一番

これは黒の(一)の絆ねが良手であるのみならず、(五)を捨石として(一三)の意義を

十分發揮させたからであります。若し黒が(五)を打たずに此手で(六)に約へ、(五)黒(十一)となつたのでは(九)のところが裾明きとなつて、不用心此上無しといふことになります。

第二番は置碁によく現はれる定石の型ですが、黒(四)と約へ、白が(五)と截つたとき、黒(四)を棄て、



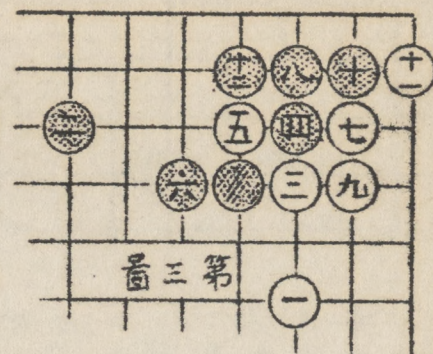
第二番

(六八)十と隅を堅め、白に(十三)と後手で(四)を抱へさせた上、黒(四)と大場を占めさせたのは、(四)を捨石とした效果であるといつて差支へないでせう。

型ですが、白(五)を捨石と見ることが出来ます。白は黒に(六)と應じさせた上、

第三番も置碁に現はれる定石の





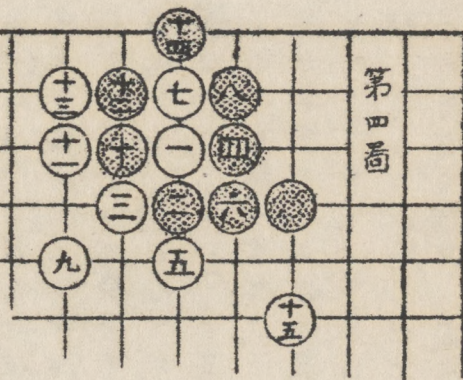
第三番

他の活躍方法を講じたかも知れませんが、何れにしても捨石を利用して自分の陣形を整えらるゝか、或ひは根據地を造り、外勢を張るなどは最も當を得た作戦の一つであり、趣向であります。

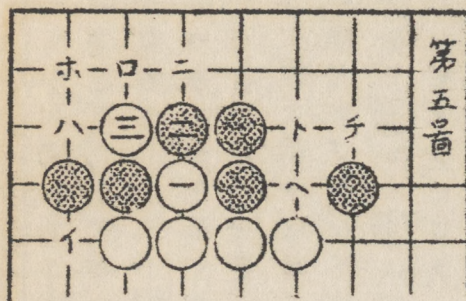
第四番は白が(一)と(七)の二子を捨石として外勢を張つた実例で、この形で云ふと黒の(八)と(十)が餘り感心しない手であり、白の(九)は黒が(十)と截つて来たら(十一)と外を塗つた上、黒が(十二)で二目を提つてゐる間に先手で他の要着を占めやふといふ趣向の手です。

第五番は白(三)と切つて捨石としたの

(七)と形を整へる趣向に出たもので、(五)の捨石がなかつたらこの趣向は実現しません。ですから黒が(六)と應じなかつたら、白は(五)を捨てずに



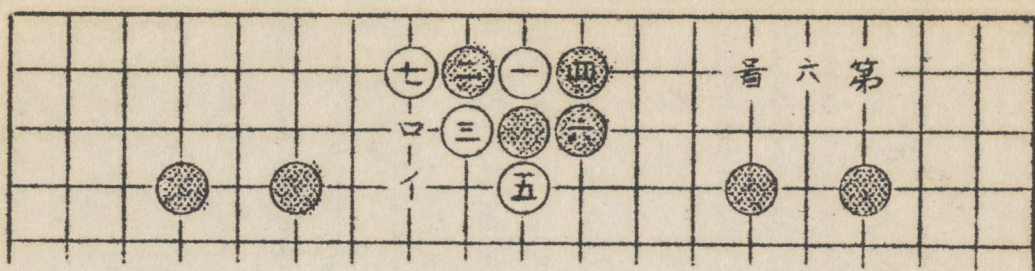
第四番



第五番

は、妙味のあつた處で、白が(一)の手でたゞ(一)に下つたのでは後手になるばかりでなく、味も素つ氣もありません。が(一)と出ると、(三)と切つたればこそ、黒は放つて置くわけに行かず、(四)か(八)へ應じなければならなく、なつたので、若し(四)なら白(一)と下つて先手を取りつつ裾を堅めることが出来るし、黒(八)なれば白(四)と行び、黒(二)の方から約へればこれ亦白(一)の





約へが利きます。で  
黒は(ホ)の方から約へ  
るより外仕方がない  
のであります。と白  
は手段を変へて、今  
度は(ヘ)の方から突出  
て黒に(ト)と約へさせ  
た上(チ)と截り、黒を  
低く這はせるといふ  
やうな事になつて、  
結局(三)の一目の捨石  
の爲、黒は可なり不  
理な立場へ追込まれ  
るといふやうな結果  
になります。

第六番は置碁に屢々  
見受ける形で、黒  
は白(一)と打込まれて  
大低去就に迷ふのが  
常のやうです。事実  
この(一)は曲者で、一  
筋縄では取扱へない

とところに腕の見せ場もあるわけですが、  
白はこの(一)を捨石とし、餌として、大  
物を釣らうといふ野心です。黒は  
この手に乗らないうちに豫め覚悟して  
かゝることが肝要でせう。詰り(一)を捨  
石にして白は巧みに黒を遮断しつゝ、敵  
の陣地を突破した形ですから、無論次  
の手で(イ)とか(ロ)に打つて自分の形を一  
先づ整えるでせう。で黒は(二)で(五)に立  
つのがいいやうです。

第七番は侵分と共通する形ですが、  
白(一)と切つて出るの一面から云ふと  
立派な捨石で、この捨石の爲め白は侵  
分で七目からの得をするのであります。  
何故なら、(三)と打ちかいて置いてから  
(五)と約へ、更に(イ)ときてると黒は(三)の  
ところを粘ぐでせう。すると白は(ハ)と  
行びますから上辺の黒が全滅といふこ  
とになります。で黒は白(五)のとき(ロ)と  
粘らず白の頭端に任せますから、白は  
この一目を提り、更に(三)のところまで二  
目を提ります。黒はこのとき一目を取







## 二 劫の妙味と價值

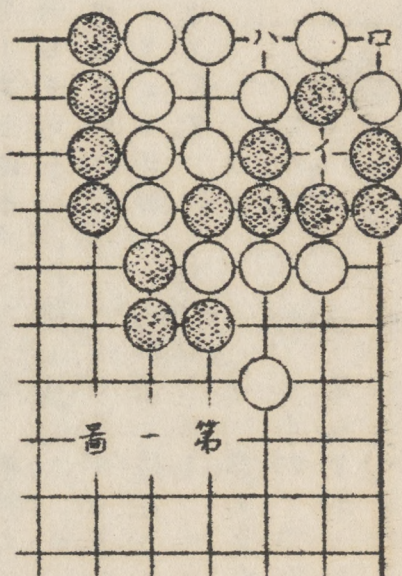
本因坊第一世算砂の終世の教に『碁なりせば、劫を打つても活くべきに、死ぬる途には手も余りけり』とあり、すが、劫の利用如何に依つては死ぬべき石も活き、又活きるべき石も殺されるのでありますから、碁の戦術として劫は正に潜水艦以上の働きを為すのであります。

併し、一口に劫と云つても、劫には色々種類があります。今簡単に大別してみると、(一)本劫、(二)二段劫、(三)三段劫、(四)寄せ劫、(五)花見劫、(六)兩劫、(七)兩劫持、(八)三劫、(九)萬年劫等が即ちその主なもので、各特徴がありますから、以下順を追つて説明を施して見ます。

### (一) 本劫と二段劫

第一番は則ち本劫と二段劫を示したもので、白は①と提れば直ぐ當りと争ひますから本劫ですが、黒にして見ると④と提り、更に⑧と提らなければ當

りとなりませんから、劫の二階段を踏むわけで、従つてこの種の劫を二段劫と云つ居ります。

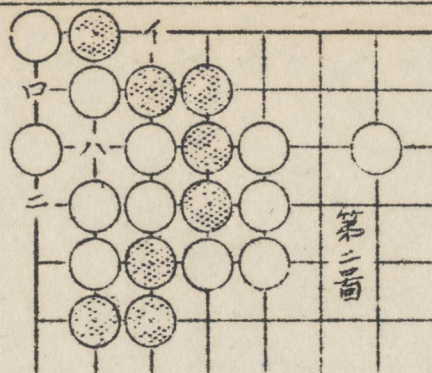


### (二) 三段劫

第二番は本劫と三段劫で、白から①ふと①と提りさへすれば眼が出来ますから、黒は獨りでに死にます。が黒は④⑧②と三度も劫を提つて末をければ白を提ることが出来ないので、自然三段劫の名前が出て来た訳で、同じ劫でも黒に取つては随分不利な劫で、假りに白がこの石を棄てる續りで黒が一つの劫を提る間に他の要所へ打つて一



手に十目づゝ得してゐるとすると、三度び劫を提る間に白は三十目から得することになりすから、この石が三十目以上の價値があれば兎も再、それ以下であるとき黒は

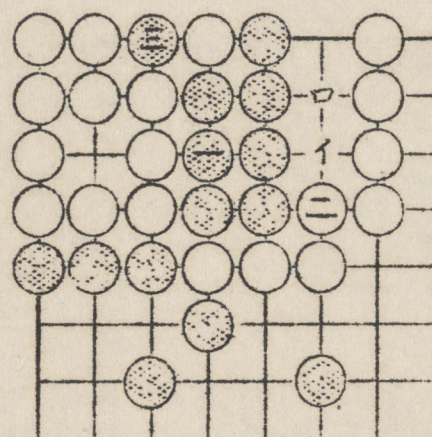


劫に勝つて墓に負けたといふ結果になりす、ですから、劫争は常に大局的に打算して、最後まで劫争すべきものか、この劫を利用して、他で手段を施すのがいゝものか――を慎重に考慮すべきであります。

### (三) 寄せ劫

寄せ劫には第三番の如く、白黒両方から寄せてかゝる劫と、たゞ一方から寄せればいゝ劫とがあります。寄せの数の多い程不利を認て、本番に就いて云つても、黒は①と一手さへ詰めれば

直ぐ本劫になります、白はまだ①②と寄せて来なければ本劫になりませんから、黒はそれ迄で手を抜いて他で大いに活躍を試みるかも知れません。この形で①



第三番

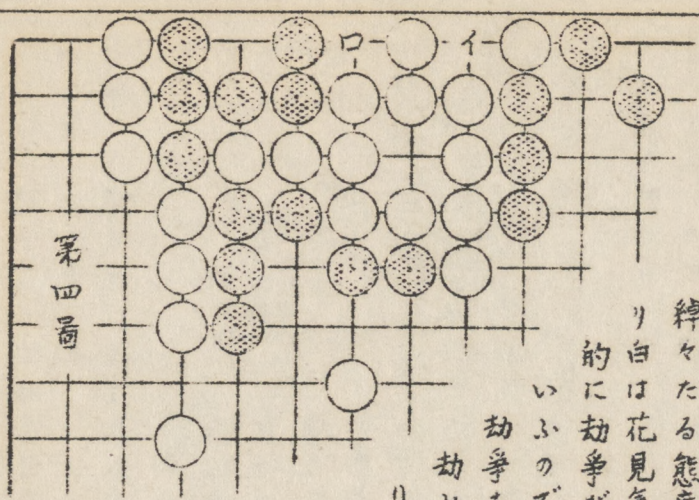
の詰めは、兩方に關係する寄せ手です、から、詰めた方が損するわけ、成る可く、關係

係のない他の方面から寄せてかゝること、が肝腎です。たゞこの場合黒の寄せ手は①、②、③、④、⑤、⑥、⑦、⑧、⑨、⑩、⑪、⑫、⑬、⑭、⑮、⑯、⑰、⑱、⑲、⑳、㉑、㉒、㉓、㉔、㉕、㉖、㉗、㉘、㉙、㉚、㉛、㉜、㉝、㉞、㉟、㊱、㊲、㊳、㊴、㊵、㊶、㊷、㊸、㊹、㊺、㊻、㊼、㊽、㊾、㊿、とありますが、若し外部に寄せ手があるとしたら、①、②、③、④、⑤、⑥、⑦、⑧、⑨、⑩、⑪、⑫、⑬、⑭、⑮、⑯、⑰、⑱、⑲、⑳、㉑、㉒、㉓、㉔、㉕、㉖、㉗、㉘、㉙、㉚、㉛、㉜、㉝、㉞、㉟、㊱、㊲、㊳、㊴、㊵、㊶、㊷、㊸、㊹、㊺、㊻、㊼、㊽、㊾、㊿、の可く自分で詰めない方が得です。詰める餘裕があつたら、その手で他の稼ぎを考へることが必要です。



(四) 花見劫

第四番は花見劫の簡単な雛形ですが、黒は①と劫を提つて粘がなければ完全な持とならないに反し、白は劫に勝てば①と詰めて黒を提り、悪くても持です。この劫争は黒が命がけの真剣であり、白は案外朗らかな氣分で餘裕



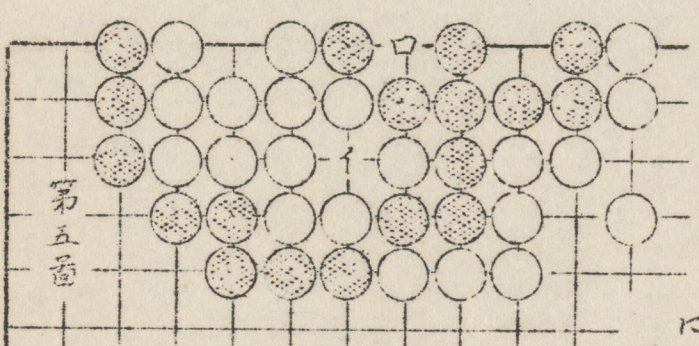
第四番

絆々たる態度です。詰り白は花見氣分で樂觀的に劫争が出来るといふので、此種の劫争をお末花見劫といつて居ります。黒に取つては洵に不甲斐ない積にさほる損劫です。命には変へられませ

んから、白の悔幾にせんじつ、も最後まで劫争するより外仕方がないのであります。

(五) 兩劫と兩劫持

第五番は兩劫でも持となるものです。といふのは何方から劫を提つていつてもお互に別々の劫を提つて行けば永久に死なず、相方互死



第五番

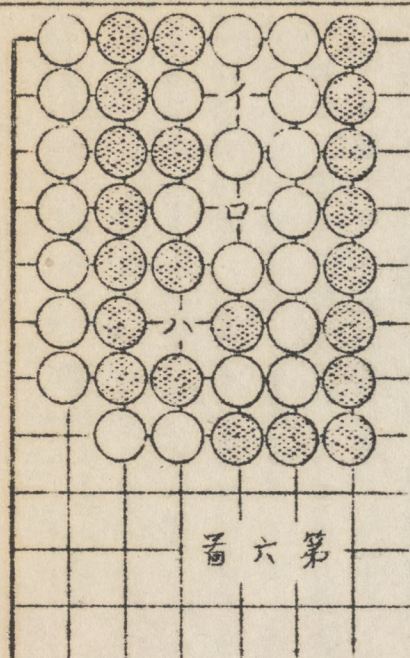
で活きて行けるのですから、結局持にするより仕方がありません。同じ兩劫でも①のところが詰つて、最一つ白左上にでも劫があるとすると思つた不利な劫で、黒が①の劫を提ると白は左上の劫を提るといつた具合で、



白はいつでも左の劫で逃げ場があるに  
及し 黒は寧ろ①の劫で攻め立てら  
れ 何時までも立つ瀬がないといふこ  
とになります。

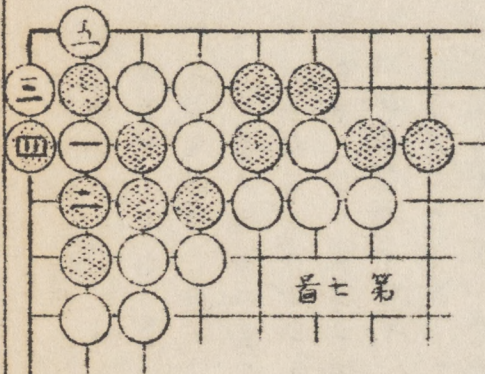
### (六) 三劫

第六番は三劫を示したものです。  
黒が①と提れば白は②と提り 黒が③  
と提れば白は④の劫を提るといつた具  
合で永久に際限がありませんから、何  
れが三劫をあきらめない限り、三劫が  
出るとその碁は無勝負で中止すると  
いふのが碁の規則になつております。  
最初にこの三劫が出たのは織田信長



が本能寺で祝賀の宴を開いた時 本因  
坊第一世算砂と利賢が對局して信長に  
興を添へてゐたところ、不思議にも三  
劫が出たので中止し、夜更けて歸つ  
た後であの凶変が起きた為め、爾來三  
劫は凶事の前兆であるが如く世人から  
忌み嫌はれたものです。これは無論迷  
信ですが、三劫を無勝負にするといふ  
のは恐らくその時の碁が前例となつた  
ものでせう。

最後に劫を石の死活に最も有効に利  
用したものが第七番の形です。則ち隅

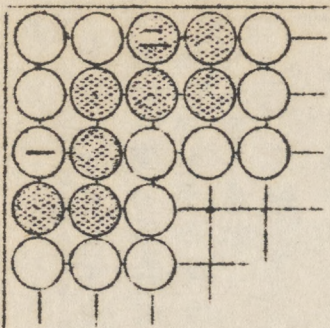


の白と黒の攻合  
の場合、白は僅  
に二手ですから  
何う考へても負  
けるのが當然で  
すが、白が①と  
打つて當てると  
劫になつて勝敗  
が何れとも判ら  
なくなるところ

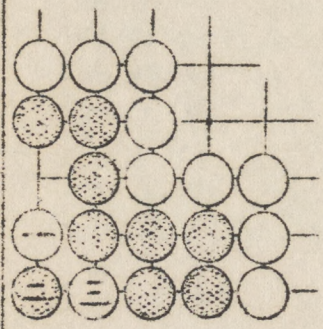


に劫の威力があり、価値があります。則ち①より⑤までとなつて劫争が出現する訳で、黒もやす／＼と三目を提れないばかりか、どうかすると自分の存立さへ危くなるのであります。がこの劫は白も黒も二段劫で、可なり手数のかゝる劫ですが、兎に再二手でやす／＼と提られるべき筈の白が、互再の劫争で何れとも勝敗が判らないといふのも一つに劫を利用した結果であります。尙特殊の劫に「劫盡し」と云ふのがあります。これは劫による死活の例にもなりませんが、第八番の如き形の石は曲り四目となり、結局第九番の白①黒

第八番



第九番



②と打込んで劫にするより活きる道がありませんが、黒から劫に仕向けて行く訳ですが、白はすつかり劫種がなくなつてから第八番の如く①と殺しにかゝるわけで黒が劫を立てる頃は既に劫が無くなつてゐる時ですから、この劫は無論黒の負けて、自然黒の石は死ぬこととなります。で第八番の如き形が出来た場合は、実際に劫争をしなくても、この黒は死にと云ふことに碁の規則で極つてゐるのであります。その他、四劫、萬年劫は読んで字の如くでありますから、茲で殊更説明するまでもありますまい。

### 追撃と打込の要領

#### (一) 追撃の仕方

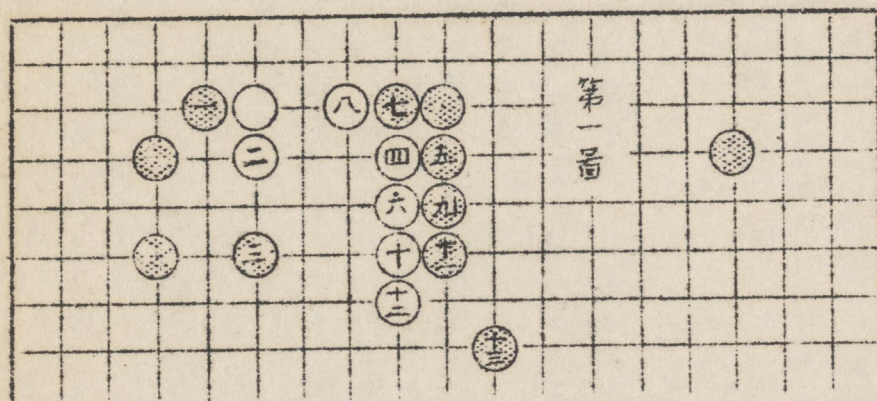
碁の戦は攻めるか守るかですが、下手な攻めは攻めざるに而かず、下手な長追ひ百目の損と云ふことになり、合理的な攻め方であれば、算を乱して逃げる敵を追撃しつゝ、長驅敵



の根據地を衝くとか、或は敵をして疲弊困憊せしめ、その間に莫大の利益を占めると云つた結果になるのであります。追撃の仕方は必ずしも追ふばかりが能てはなく、『勢に乘じ積極的に追撃する場合』と、『軽く追つてあつさり退く場合』の二方法のあることは、説くまでもないことであります。この二方法を如何に巧みに活用するかは依つて追撃の巧拙が出て来るわけですが、併し、その何れであるにしても、追撃には追撃としての手順があり、合法的手段があることは勿論であります。

第一番の白一子を攻める場合、黒一と尖頂け、白二と行びた時、黒三と冠せるのは當を得た攻め方で、この形に於けるいは手順であります。白としてはこの二子を捨てるわけに行きませんから、四と進路を求めざるでせう。そこで黒は五と押し、次に七と曲り、白が八と受けたら、九十一と形勢を張りつゝ、白を追撃して、巧みに大地域占領の方

策を構えます。萬一白が八辺りで手抜きしても仕様ものなり、黒は透かさず八と出て白の根據地を粉碎するにとにりますから、



白としては一子手抜きが出ますまい。右上隅の黒は比較的防備が備つてゐますから、黒は中辺と下辺方面から白を追撃しつゝ、上下に地域を占領することが出来る。追撃の目的は達せられたことになり、白としては唯逃げろだけに目を追



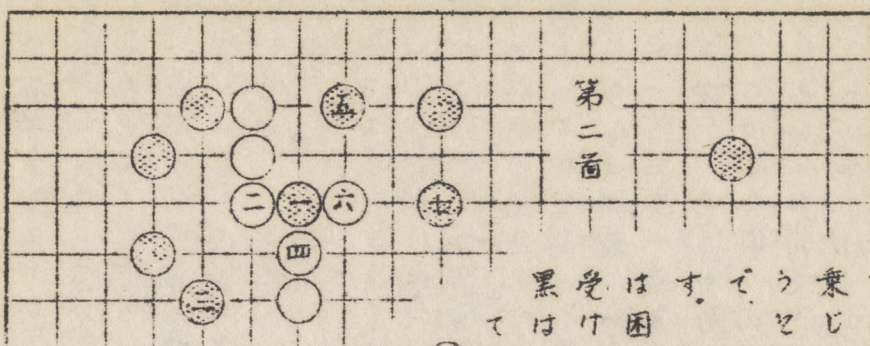
はれ 得る処何物も無いといふやふな  
悲惨な結果に陥るのであります。

第二番

黒が①と打つたのは切斷

第二番

する勢を示しその處に  
乗じて何事か事を計ら  
うとする計畫のある手  
で、相當殿しい打方で  
す。白は切斷せられて  
は困りますから、②と  
受けるのは當然ですが、  
黒はこの①を捨石とし



て巧みに之を利用し

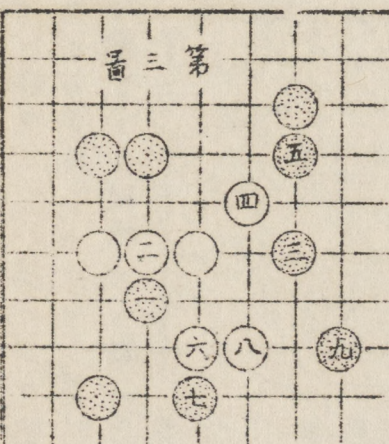
③⑤⑦と打って白

を凝り形にしよ  
うといふ野心で  
す。詰り白は自  
分の石を整へる  
為にこゝで二手  
も三手も費して  
非常な損失を招  
いてゐる間に、  
黒は自分の形を

整へ、外勢を張りつゝ、猶追撃の餘威を  
蓄へるといふ最も狡猾な作戦と、巧妙  
な打方に出てゐるのは、賞するに餘り  
ありません。蓋し追撃や防備が、唯追撃  
や防備其物に偏するのには甚の戦術とし  
て最も忌み嫌ふものでありますから、  
黒の追撃方針の如く、攻めつゝ自分を  
守り、地を取ると云つた一石二鳥の二  
段三段の構へでなければ、戦術として  
當を得た、賢明な策とは云へないので  
あります。

第三番

中の白二子を如何に攻め  
たらよいが、攻め方に依つては数蛇



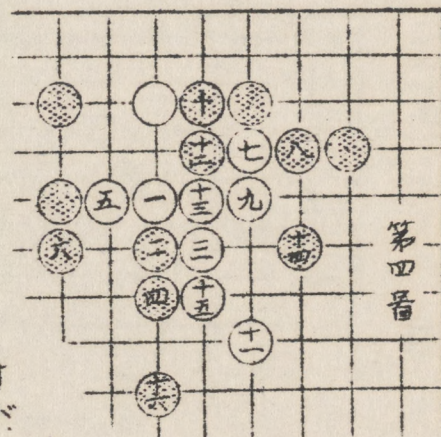
に終り、却  
つて自分を  
傷付けるこ  
とにたりま  
すが、攻め  
方さへよか  
つたら、こ  
れを利用し  
て幾くらで



も黒地をこしらへることが出来るので  
すから、黒としては可なり頭を悩ます  
べき問題です。

さて熟慮の後先づ(一)と覗きました。  
而して白に(二)と粘がせた後(三)と冠せま  
したが、この戦法は追撃に用ひる謂は  
ば常套手段で、決して珍しい打方では  
ありません。白(四)と尖んだ時、黒(五)と  
立つたのは、攻守を兼ねた手で、白の  
白の出口を塞ぎつゝ、隅への打込みに備  
へた意味を含んで居ります。一方の出  
口を塞がれた白は、さうばと(六)に飛出  
やうとすると、黒は(七)と頭を叩き付け  
て出口を塞ぎ、更に九と息をつかせず  
追撃してゐるのは洵に當を得た手順で、  
これで黒は上辺と右辺に外勢を張りつ  
つ、白を追つてゐるのですから、黒の追  
撃方法は十分成功してゐるものと云へ  
ます。

第四番——この形は実戦によく見受  
ける型です。これを一つ頭へ畳み  
込んでおくだけでも可なり力が付き



第四番

すが

應用も出来  
る筈です。  
中の白一子  
は、黒から  
夾撃を受け  
顧る危険な  
立場です。か  
ら(一)と飛出  
すのは當然で  
す。黒が(二)と頭

からがんと叩き付けてゐるのは、随分  
急激な着手で、宛然捨身の突貫といつ  
つ形です。無論左右に味方が控へてゐ  
るからこんな打方も出来るので、味方  
の背景なしに突貫したところでは無意味  
であります。

黒(十)は可なり考慮すべき大切なと  
ろで、この手で土と包圍するのの一策  
です。が、この場合は(十)と突張つて白の  
根據地を奪ひ(十一)と追撃する戦略を採  
つたもので、白はお蔭で下辺に厭々味  
を残しつつ、命からがら逃げ延びるのに



日を追はれ、左右の外勢は黒の蹂躪するまゝに放任せざるを得ないやうな状態に立ち至つて居ります。

第五番——この白を

攻めるのに、(一)と壓迫を加へたのは白を窮せしめようとする手段で、これに對し白が(二)と脱出を計つたのも當然の処置と云へます。が黒から(三)と約へられて方向を変へ、(四)(六)と

活路を見出し、半

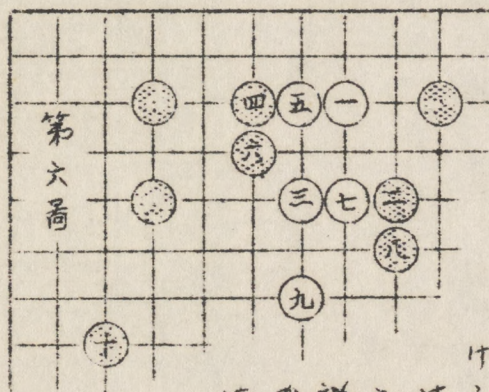
くも脱出すること、は出来ましたものの、これが為上辺一帯を黒から塗り廻され、

白の畏縮した一本直に反し、黒は雄大な無辺の外勢で、逆も比較に劣らない程優劣の差を生じたのは、蓋し黒の追撃方法が宜しきを得たからであります。

第六番は白(一)の打込みを追撃する手段ですが、黒(二)と先づ壓迫して置いて、(四)と敵の急所を狙ひつゝ、(六)と自分の形勢を作る実利主義を選んだのは、追撃方法として一寸緩慢なやうにも見受けられますが、実は

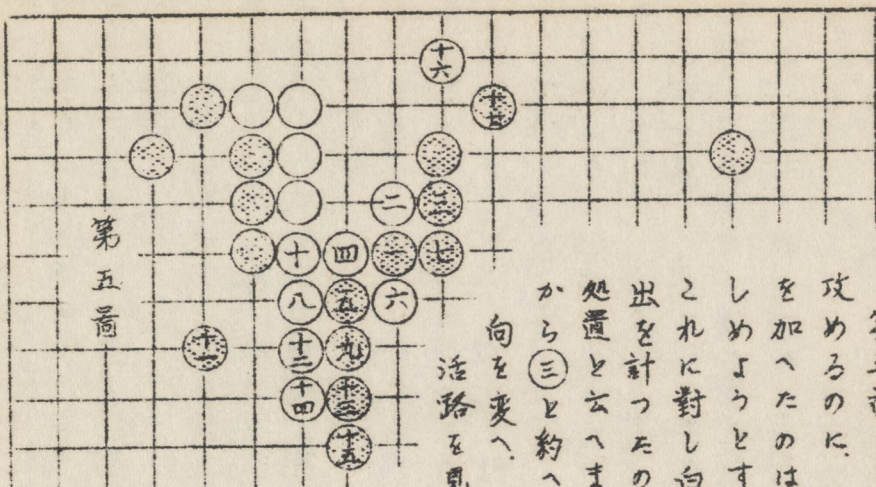
は実利を占める

ことが、基戦の秘訣でありますから、この作戦は決して悪いとは云へます。



第六番

(二) 打込の要領  
打込みは戦術の一つでありますから、

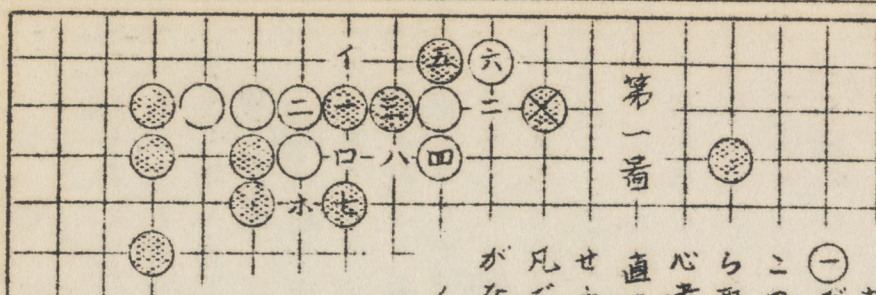


第五番

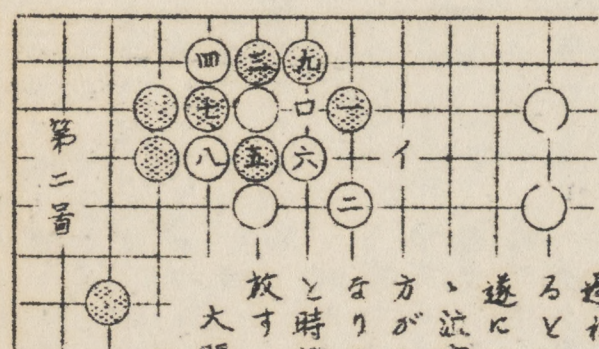


打込みの要領も心得て置かないと、実戦上立打ちが不首尾になることはおぼろまでもないことであります。

### 第一番



打込みとは第一番の黒一が則ち打込の手ですが、この形は置碁の頂定石から取つたものですが、初心者ならこの場合(ホ)と正直に押して行くところとせうが、それでは餘り平凡であり、單調すぎて味がなくなりまゝ。碁の如く黒に(イ)印の石がある場合には黒(一)の打込みがさくのであります。然にして、以下黒七迄となつてこの白は兩断されてしまひました。手順中黒(三)は(イ)と下る場合もありまゝ。その時には

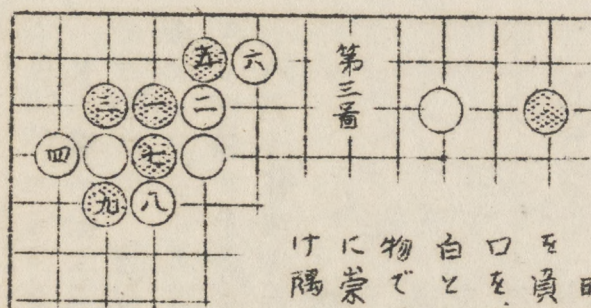


白(四) 黒(二) 白(八) 黒(五) 白(六)とつた運びになります。又白が(四)と押へず、(二)と続ける手もあります。この場合は黒(五)が(ハ)と変ります。第二番の形で黒が(一)と打込んで来るのは當然で、傍觀してゐるにしては、白地が餘りに大きすぎます。それに今をら防備が手薄ですから十分突撃して入り得る餘地があります。が徒らに氣遣はれたり躊躇してゐると打込の時機を逃し、遂には指をくわえたまゝ泣寝りするより外仕方がないといふことになりまゝから、打込みと時機は常に念頭から放すことの出来ずい重大問題の一つであると言ふべきであります。さて黒(一)の打込みに對し、白



は番の如く(二)と受けるか、但しは(一)と掛けるか、(六)へ尖むかでせう。番のやうに(二)と冠せて来れば黒(三)と盤りに打つのがこの際唯一の手段で、白が(四)と打つたとき、黒が(五)と縛ね込むのは最も味のある手順で、初心者には一寸真似が出来ないかも知れませんが、(三)と盤りに打つた以上、この縛込を為すいでは(三)を盤りに出た価値がありません。黒(七)の截りは反對の(四)の方から截る手もありますが、(四)の方からですと(九)に瑕が残つて面白くありません。が兎に再かうして黒は(五)の味方を一つ失つただけで、白(四)を捕獲した上に、完全に隅の黒と連絡したのみならず、白地を消し、更に(一)の進出に依つて、今後大いに荒れ廻る餘地が残されてゐるのでありますから、黒としては打込みの目的を完全に達したと云つても、決して過言では無いでせう。

第三圖の如く、一間に締つてゐる敵地へ打込むのに、(一)と打込む場合を示



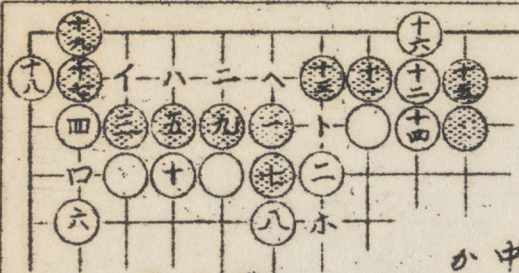
したものですが、これに對する白の受方は番の形以外、(二)で(七)へ粘ぐ場合と(三)へ約込む場合があります。粘ぐは黒(三)は番の如く運び、約込む場合は(二)のところへ出ます。いずれにしても、もこの打込みは、白の地を消し、而かもそこで活きやうといふ決死の振舞ひでありますから、白としては無傷で終る筈がありません。

眼をさせなければ手傷を負はせて何処からか出口を求めらるでせうから、白としては随分厄介な代物です。で結局障らぬ神に祟り無しで、出来るだけ隅に小さく活かし、その代り、黒を包圍して自分はその代償を外勢で補なうといふことになり



ます。その何れが利益であるかは、結果を見なければ判らないうです。から打込み必ずしも利益であるとは云へません。この点から云つても打込みには時機と場所とが特に大切なことが痛切に感じられます。

第四番——本書の形は互戦によく現はれますが、この場合の黒の打込みは何処が一番よいかと云ふと、普通は首の如く打込むのが常で、これ程白は堅陣で堅めて居ながら、黒は結局この



第四番

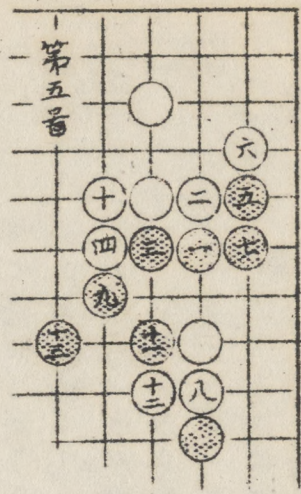
中で悠々と活きるのです。から不思議です。無論此の打込みも時機と周囲の配合を考慮に入れらるべきで、唯打込みさへすれば活きたれと云ふは軽平易簡單なものではありません。黒一(一)の打込みに對り、白二(二)の受方は、

首の如く二(二)と尖むが、但しは九(九)と約へるが、その一つを選ぶべきで、假りに二(二)の尖みであれば、黒三(三)と頂けるのはこの場合の手筋です。白四(四)と約へる手筋で五(五)と約へる打方もありますが、この場合は黒五(五)でイと下り、白六(六)で四へ縛り、黒七(七)で七へ曲り、白八(八)で口と粘り、黒九(九)でハと行び、白十(十)で九、黒十一(十一)で行び、白十二(十二)で七、黒十三(十三)で五と下つて活と云ふ手順になります。

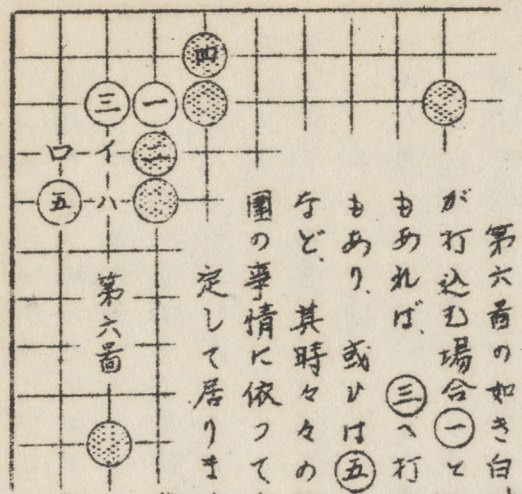
が、首の如く白が四(四)と約へるとか、或は口(口)と下つた場合、黒は白の瑕を狙つて五(五)と引き、白が十(十)と粘ったとき、黒五(五)と尖むて活き形となります。黒七(七)と出たのは、ホの瑕を残すが爲で、五(五)と約へた場合、この瑕が非常に物を云ふことになりす。又白二(二)と七(七)と押す手もありますが余り感心出来ません。又白二(二)を九(九)に約へる手もあります。そのとき黒は三(三)と打ち、白の應手を問ひ



ます。白として(四)と下る位のもので  
 せう。そこを透かさず黒(二)と絆れ。白  
 (八) 黒(一) 白(七) 黒(ト) 白(二) 黒(士)と  
 繋ることになります。

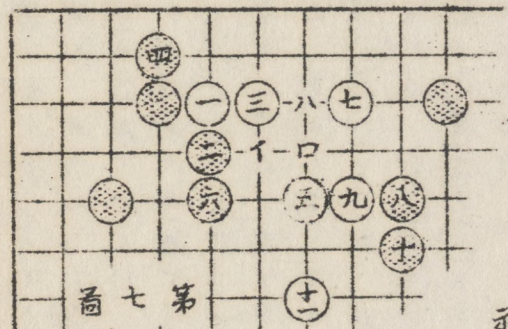


其他  
 第五番  
 の如く  
 運ぶ手  
 段もあ  
 ります。



第六番の如き白地へ、黒  
 が打込む場合(一)と頂ける手  
 もあれば、(三)へ打込む場合  
 もあり、或は(五)へ打込む  
 手など、其時々々の趣向や周  
 圍の事情に依つて決して一  
 定して居りません。一  
 定して居  
 るのは、  
 第六番  
 の如く  
 難しくは  
 ありません。

味もあり、腕を振るふ餘地もある処で  
 自然考へれば考へる程幾くらくても手が  
 出て来らぬ訳であります。假りに(三)へ(一)  
 と打込む場合、白の應手は(イ)と尖み  
 つける場合、(四)と斜走に封鎖する場合、  
 (ハ)と下る場合など色々ありますから、  
 これを詳説してゐたら全く際限がなく  
 なります。で打込みの主なるものだけを  
 解説して他は一時お預りします。  
 第七番——番の打込みは第六番と互  
 對に外側から(一)と頂けた場合の應接を  
 示したもので、番の

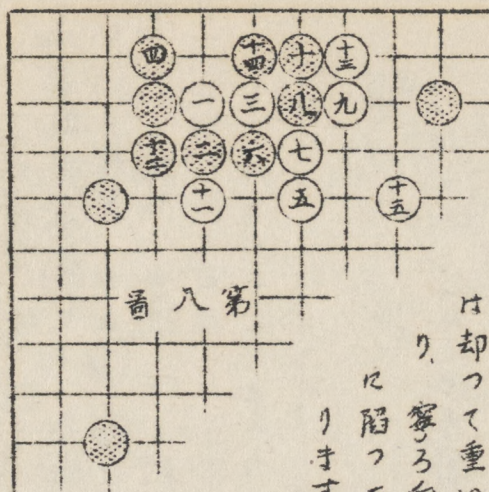


如き黒の領域へ、  
 白が突入して敵  
 地を軽く潰さう  
 といふ場合は、  
 (一)と頂けるのが  
 手筋です。(五)  
 と白が  
 斜走に  
 飛んだ  
 のは、



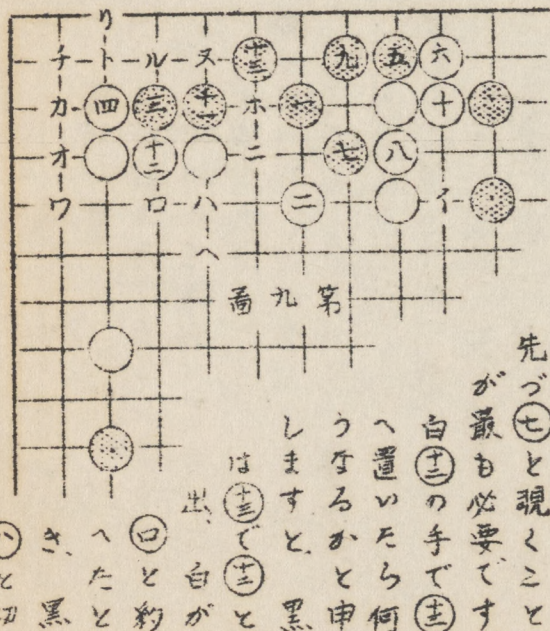
一と三を捨てる腹ですが、假りに黒が六をイと押し、白四と約へたと、黒八と截つたも結果は第八番の如く、黒は却つて重い形に付

り、寧ろ白の術策に陥つた感があります。



第九番 — 本番の形も互先の碁に屢々見受けられる形ですから一應覚へて置いて戴きたいと思ひます。番の如く白がすつかり縄張りを張り巡らした中へ、單身突進して行くことは決死の覚悟がなければ出来ないので、併し、窮すれば通ずる、決して悲観したものではないとせん。たゞ問題は打込

みの時機と環境を考慮することです。番で云ふと上辺中央に味方の二子が控へてゐるので、この二子を利用さへすれば挺身突進しても、決してむごむご捕虜になるやうな憂ひはないです。たゞ茲で特に初心者の注意を要する点は、七の覗きです。この覗きを忘れて先に九と引くと、後に覗いても白は八と粘がず、イへ衝當つた影響が二子へ響いて来ますから、この場合は



先づ七と覗くことが最も必要です。

白十一の手で主へ置いたら何うなるかと申しますと、黒は十三で三と

出、白が

四と約

八と切



り、白(二)と行び、黒(木)と粘ぎ、白(八)と抱へ、黒(ト)と絆ね、白(チ)と約へ、黒(リ)と下つて、眼形をこさへますから、白が(三)で(三)の処へ置いた、價値は結果無意味に終ります。

又白(四)からの変化で、隅にも約へず、に(土)の方から約へたら何うなるかと云ふと、この場合黒(五)は(四)へ頂け、白(六)で(土)を粘ぎ、黒(七)で又、白(八)で(三)黒(九)で(ル)と粘ぎ、白(十)で(木)へ粘ぎ、黒(十一)で(オ)と絆ね、白(十二)で(フ)と約へ、黒(十三)で(カ)と粘ぐ運びになり、これ亦黒は易々として活といふことになりす。

碁 白人一首

筑丸太夫 戯作

○清原元輔

千切りさな、かたみに石を絞リつゝ、未の間に買け越さじとは

○伊勢

何はこゝ短かきすきむひまの間に打たで此日を遇してよとや

○周防内侍

春の夜、買ければかりなる午後れに甲斐あら碁の名こそ惜しけれ

○良撰法師

寂しさに宿を立出て碁クラブのいつでも同じ顔と碁を打つ

○菅家

此度は四隅取りも得ず手負け山

○陽成院

中の地代けぢや勝てぬまけく粘り剣ねの三手より押せぬ左の側

○源兼昌

碁路島、園ふ地取りの打ち方に

いかで買けぬ隅のセキ守

○大納言經信

夕ざれば勝てたの隠居おとづれてわしの丸まけ狀々とする



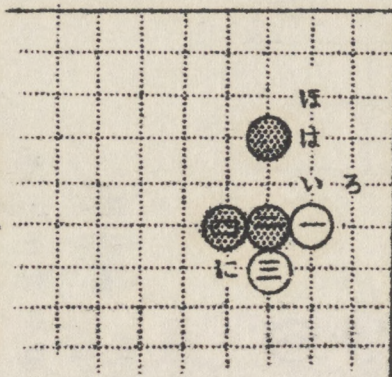
小斜走掛のり巻 ①白

(抑頂)手 頂 ②黒

# 置碁定石

目次

## 頂行定石



変化と應接(頁三十一頁)

一、いの行び

三十八番

二、ろの尖み

四十二番

三、はの碁頂

四十二番

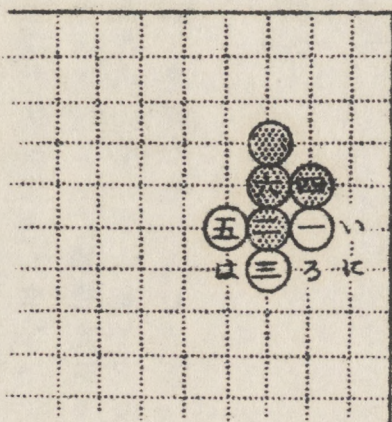
四、にの外押

四十四番

五、はの三々打ち

四十六番

## 頂抑定石



変化と應接(三十七—四十六)

一、いの下り

四十七番

二、ろの下粘

四十八番

三、はの上粘

四十九番—五十番

四、にの掛粘

五十一番—五十二番



# 三頂手

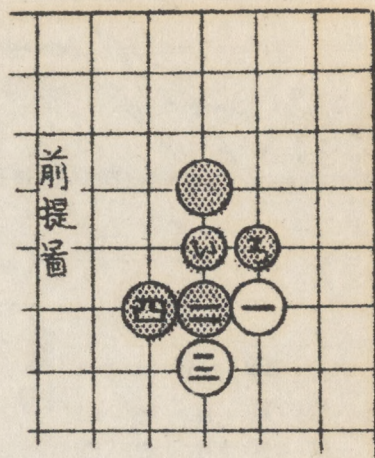
小斜走掛りの巻

白一の小斜走掛に對し、黒二と「飛び頂け」を頂手と言ふ。黒二の頂手に對して、白三が普通ですが、策戰次第で「と冲を様な手もない」とは言へません。

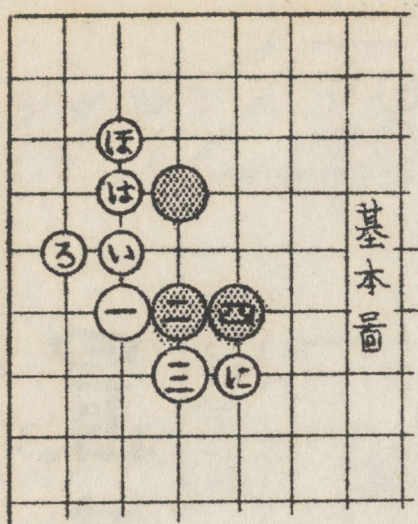
白三に對する黒四が普通です、但し場合によりては「と抑へる事もあります。之を頂抑定石と言ふ、前者の黒四と行びるのを頂行定石と呼びます。

## 基本番

白一以下黒四までを頂行定石と稱し、頂行変化の分岐点として白五で次の五種を挙げ秩序的に詳解の歩を進めます。



前提番



基本番

一、い の行む

二、ろ の尖み

三、は の飛頂

四、に の外押

五、ほ の三々打込



### 第三十八番

黒二と飛び頂けは防禦の一  
種で、此く接觸して行くの  
は早く隅を治すらんとする意が主になつて、  
白三は外部より黒二に迫る合理的着手です。  
黒四は勢子と連絡を保ちつ、勢力を中原に  
伸張した手。白五は自己の根據に資して同  
時に黒の根據に迫りました。

黒六は正當防備。

### 白の五の行

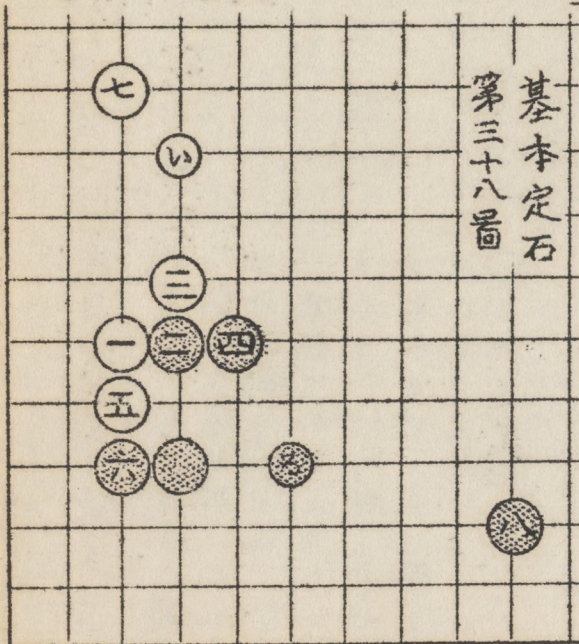
以上白五の行びに對する黒六の抑を以  
つて本定石は手止りといたします。  
何となれば次で白は局面布石の關係  
と、策戰の如何に由つて何處へ打つか  
分らぬからであります。

然しながら一般的に完成棋形としては、七  
と星下に打つのが普通とされておます、白七  
の使命は、**い**よりする黒の攻撃に備へ茲に地  
域を定めるに在ります。尚白七の着矣には色  
々あります。が次参考着に掲げ示します。

本番の白七に對する相對的着矣としては、  
黒八と下側星下に宍壯に構へて大勢を制する  
手段を取るのがよろしい。

黒八の手で**ろ**と備へるのが從來の定石  
でありましたのですが近代は本番の如く  
黒八と備へるのが良いとせられておます  
其れに關する詳細なる批判は、参考番  
2に於て示します。

### 基本定石 第三十八番

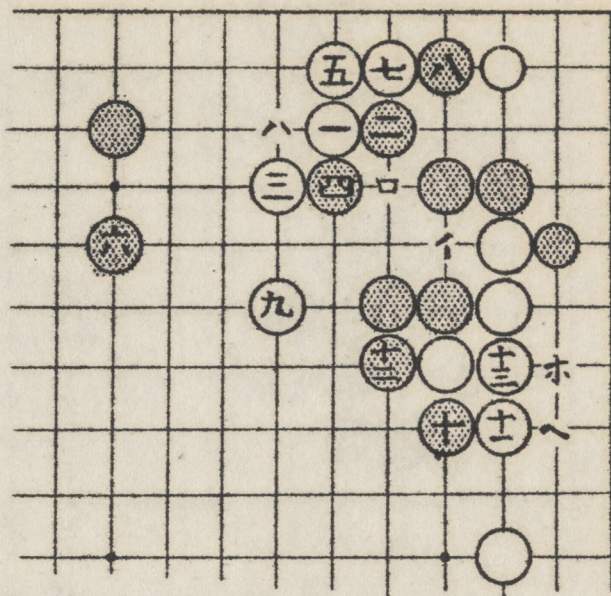








第三十九番



黒若し十の手で十二と曲らば白に  
十の夾に行ひられて不利、又黒十の  
手で十三と截らば、白も黒十一白  
となりツマラヌ、即ち黒十の一手は  
白の應手を見る巧妙の手筋、乃で白  
十一と低く應じた故、黒十二とアテ  
白の姿勢を重複せしめます、次で黒  
は③の夾に備へて④と縛ねて置くの

前オ三十番の配石の時  
白一と黒地を侵略して来  
た時黒二と尖み頂けるのはイの突破に  
備へると同時に白に迫る手、白三の尖  
は輕妙なる速出の準備、黒四は白から  
口と束られる手を拒ぎ、烈しく迫つて  
ハに断突を造るため、白五の下りは隅  
へ響かせつ、之を防ぎました。  
黒六は一、三、五、の白に迫りつ、  
右下の宏壯を計つた手、白七は先手で  
隅を窄めると同時に、③の夾を狙つて  
おます、黒十の夾は手の一種、即ち白  
の應手を見て茲を有利に捌く意です。

がよろしい。  
黒十の手筋に應じて白が十二と出て来  
ると十三と截られて次の参考番の如く  
なりて、本番と比較して、其の不利な  
姿勢である事を知らねばなりません。

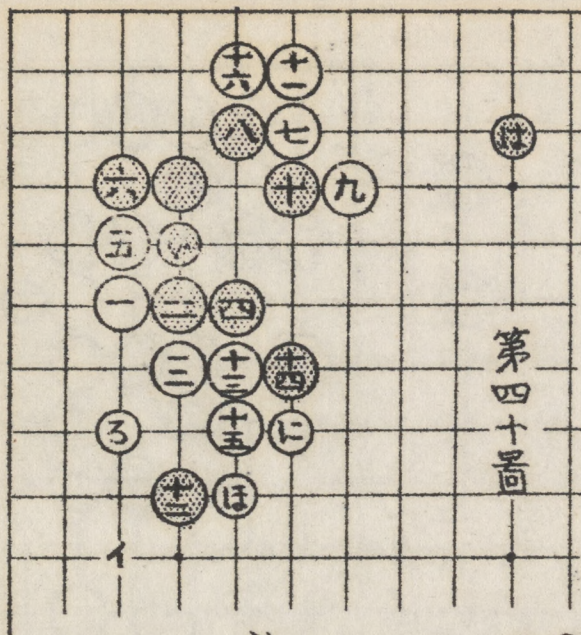


参考局

本番の如く黒十二と截られると、白十三と截り返し、手順を経て黒十八となり黒は中原に逸出しました。

本番の結果は、左辺の白石が黒の十六、十八の鉄壁に近く白は著しく其の影を薄くして、又隅に於ける黒は十四の下りにより①の夾みによる白の手段は失はれ、白の△印の存在は極めて重複の姿勢を呈してゐます。

第四十番



第四十番

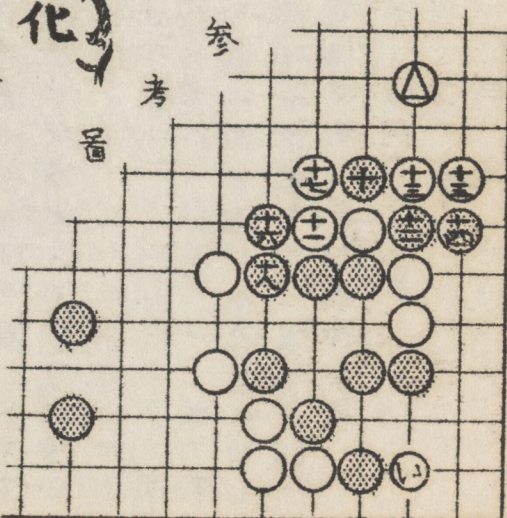
白七の変化

白七で直に兩掛の態度に出たら黒は如何に應ずべきか、やはり黒八と尖み頂け、黒十二と白の急所を衝き白のイの拓きを防ぎ白を愚形に導きます。

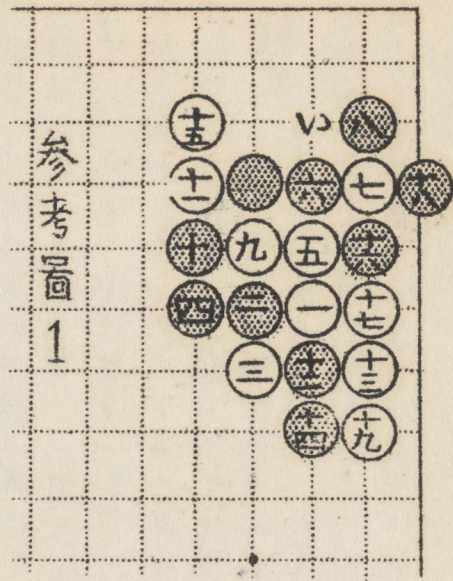
註 白九の手で十の尖に立ちますと黒③と備へた時黒より④と攻め立てられて、白十と立つのは重い形でイヶません。又白十五の手で⑤に縛ねると黒は十五の尖に截りますから白不利。又白十五で⑥と飛べば黒十五と縛ね込み前番と大差なく白は不利となる。

考

局







参考圖 1

時、黒十と白二子の活躍を制限して中原を宏壯にする手法です。  
 尚△印の一子が動き出すといふ事は局面変化の關係にも因り、主として時機問題です  
 此の儘にて今直ぐ動き出しても面白く結果とはなりません。△印が逃げるが爲め、四圍に影響を及ぼし、かへつて継子使ひになるのでは駄目です。四圍の關係に因り動かなくてはなりません。要するに白の出截の手段は如何しても面白くありません。

## 出截

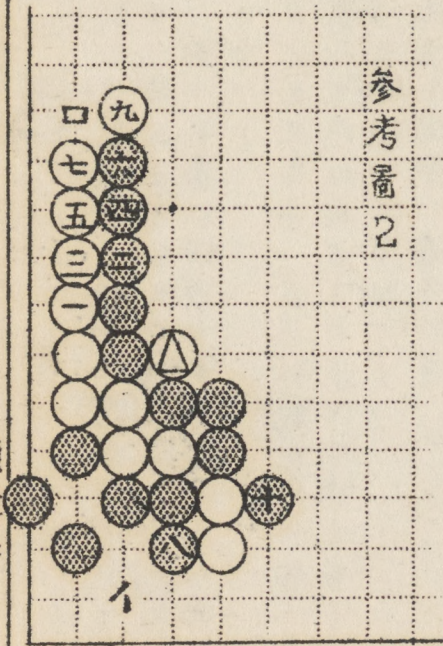
白七は九と出る準備、即ち①の断奏を利用する考。

黒十二の截は白有一の缺欠。  
 黒十六、十八は當面の禍因を除いた

参考圖 2

黒六迄運び、次いで白七の手でイと走るならば、結果は劫となります。従つて白は七迄不利の第二線を這はなくてはなりません。  
 次いで黒八と隅を活き、白九と跳ね上げた

参考圖 2



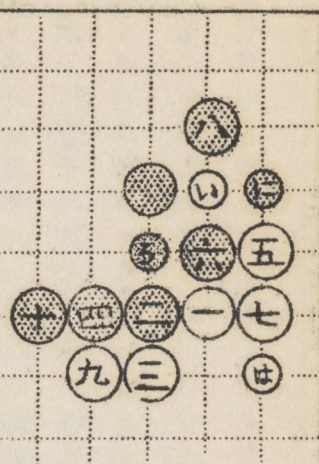


## 2 白五の尖

白五の尖に對して黒六と、**②**と二途の受けがある。本碁の六とアテ付けると白七で**①**と當て黒**③**白**④**となるのは、四十二碁の飛頂と同型ですから其の項目に譲ります。

白七は黒の出方を見る手。黒八は**⑤**の尖に抑へますと次碁と同型なり八の尖よりの**⑥**の味があります。すが本碁の八と按るのが著理です。

### 第四十碁



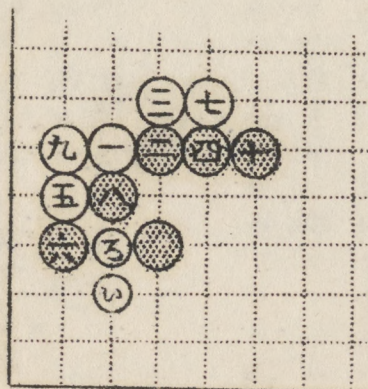
### 参考碁

白五の尖みに對し、黒六と飛び頂けた時、**③**の緯込みと本碁の白七の行ひと二途ある。**③**の緯込みは飛頂と同じ結果。

本碁の白七は次いで黒が八の手で十と行れば**③**と緯込んとする考です。黒八のアテ付けは良着です。白九と粘りますと前碁の黒八で**②**に抑へた様な理合になつたのです。が然し其の手續の閑係でさうなつたので仕方ありません。

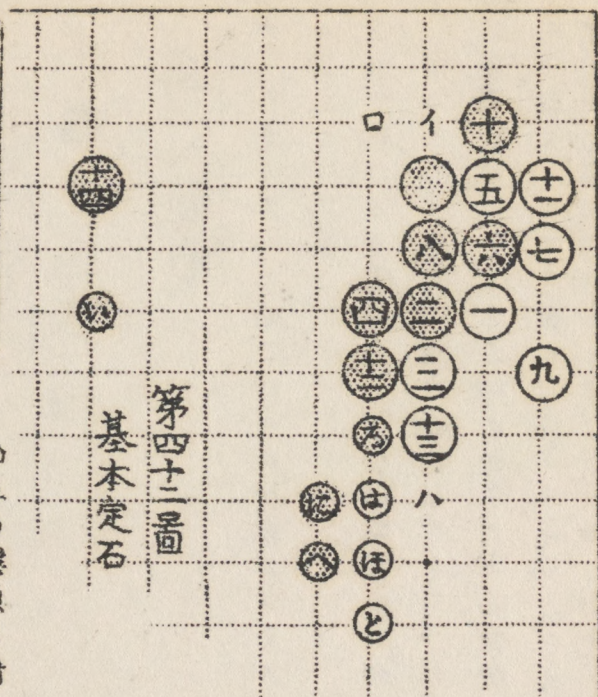
### 結果

に於て黒六の飛び頂けはるの緯込の應接もあり又前碁と比較し、前碁の黒八が輕妙なる手續で本碁の黒六と比べ有利と言へますから、黒六では前碁に従ふのが至當でせう。



参 考 碁





第四十一番

基本定石

3 白五の飛頂

最も簡単にて、白七以下黒十までは決り手、白十一と粘げば、黒は外部より十二と壓し、白十三と行ばし上側星下に十四と大勢を制す。尚白十一で十二の鼻に押す事もあります、黒は十一の鼻に白五の一子を打抜くに限る。白が十二と押す意味は大勢に主としたる手。

黒十一と打抜くは確固不拔の根據を作りたのですが要するに策戦次第なのであります。

黒十四

は十とアテ十二と曲げた午の結論であります。

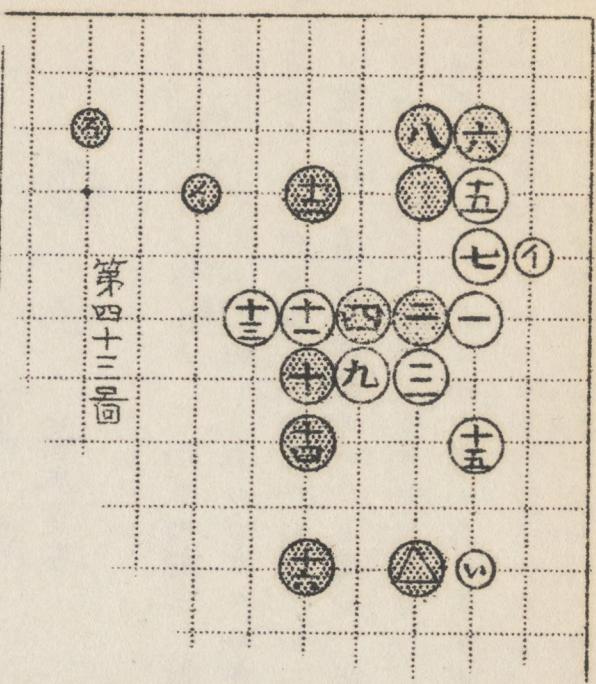
更に之を具體化する意味で●と飛ぶ手があります、或は●と押し白はなれば●と締ね、白●黒●白●と運んで上側の厚壯を計る事もあります。黒●の押しに對し白●と行ければ黒敢て追究はしません。

黒十四の本番の白●と切り黒十の一子を捕獲するのは差引勘定二十二目の侵分になります、白●と切れば●と當て一子を捨て先手で●と圍ひ上辺の黒の宏壯を計ります。本番の黒六を變更して十の方から抑へる手は次番に説明します。



黒六の二角變

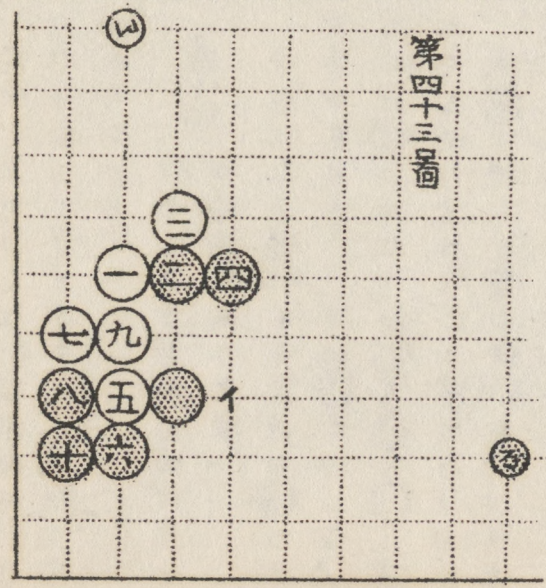
第四十三圖



黒六と外から抑へた時、白七の棒粘にするか、イと凹むかの二途。

白七と粘げば、黒は八と堅固に隅を粘ぐの一  
手、由つて以て此の一隅は安定しました。本番  
は六子局を参照として△印に勢子がある場合に  
白九と押し、黒十と繰ね、白十一と切りたる時  
に黒十二と構へ白十三と行ひ黒十四、白十五、

第四十三圖



黒十六は正形であり同時に右邊の白に響かせて居ます。或は十六の手で上側にイと備へるもよろしい。

第四十三圖

白七と凹むと、黒八以下十までは決り手、白イなら黒ろは必然的交換です。  
本番に於て白よりイと迫る筋があります。がやはり時機問題です。



白十一の出截

白十一と出、黒十二と抑へた時、白十三と十四の真から截る二途があります。次いで本圖に於て白十五の手

で④と行びる手もあります(次圖参照)

白十五の抑に十六と緯ね、黒十八と迫るのは、白を重くして攻め立てる酷しい手筋です。白は十九と粘ぐ方

に方法がありません。若し二十に截らば

黒が絞られて全滅するのです。白二十一を急

らばいとせられ上邊の白は全滅。で黒二十二以下手順を

經て何處迄も低地に壓迫して黒大判です。

参考圖下

本圖は十五を變更して十五と行びますと十六と截るが急務です。

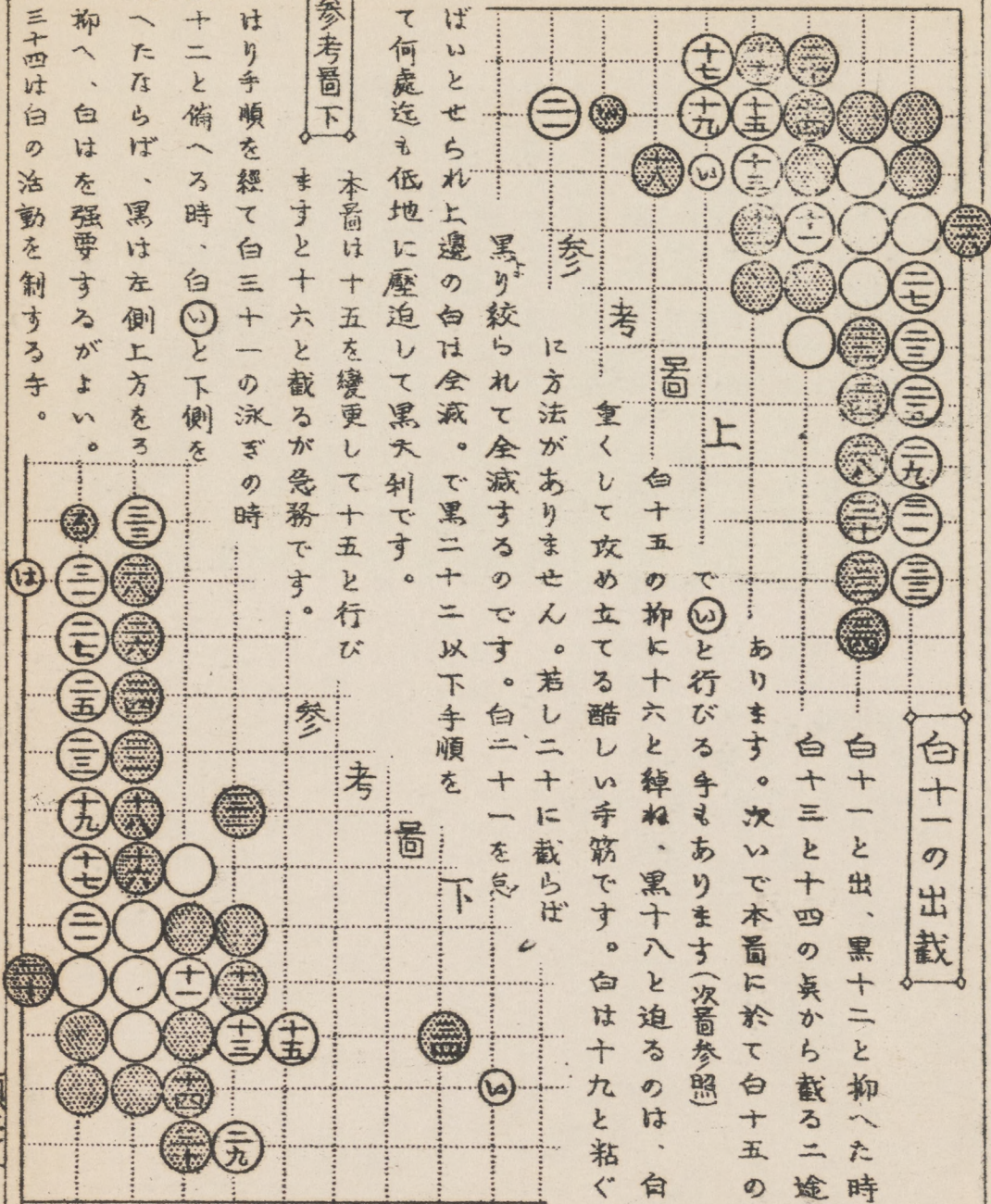
やはり手順を経て白三十一の泳ぎの時

三十二と備へる時、白⑤と下側を

備へたならば、黒は左側上方をろ

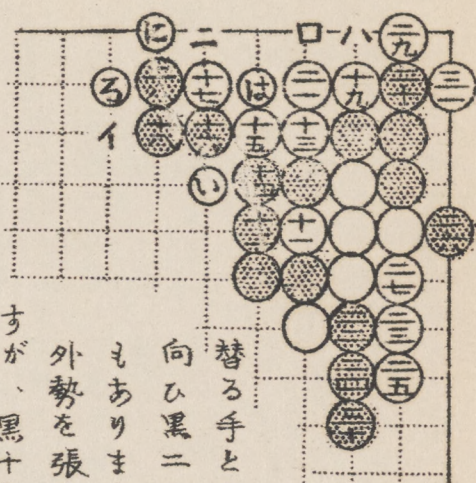
と抑へ、白はを強要するがよい。

黒三十四は白の活動を制する手。





上 考 参



白十三

と下側を截ると参考局上下の变化となるぐらひのものです。上局に於て、黒

十八で二十八に二段緯しますと、白十八の尖に截り、黒いと粘ぎ、白は黒は白に黒二十一と振り

替る手ともなり或は白十八黒い白は黒イの時白十九と隅に向ひ黒二十白二十九黒口白八黒二白二十一と還ぶ様な変化もありすがヤハリ本局の十八と行び白を低地に仄迫して外勢を張る策戦が良い。白十九で二十八に出る手もありますが、黒十九白はを余儀なくせられヤハリ

低地を這ふ事になります。黒二十二で斯く隙いた刹那を利用し

左連の白をも壓迫し黒は外勢を得て大利です。下局に於ては下

黒三十と打缺く変化で黒三十二と曲りて隅に餘韻を残

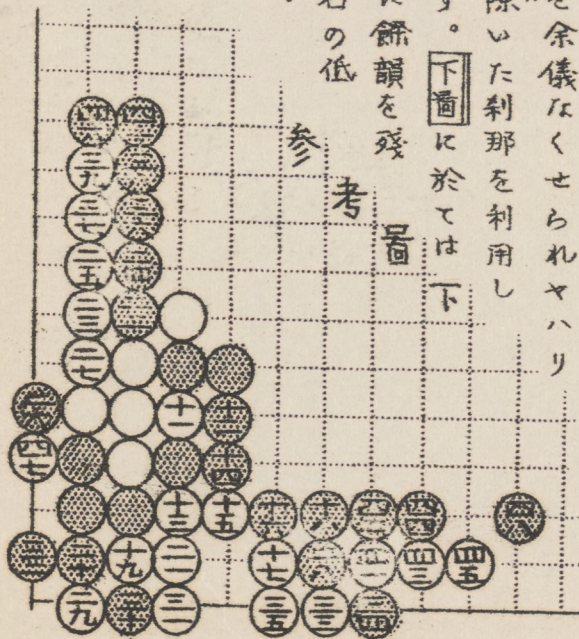
考

し飽迄隅六子を捨石として白を牽制し、左右の低地に壓迫して白から宏壯を謀るのが最上策。

結論

白十一と出截るの白よりすれば無理形で結果より見て面白

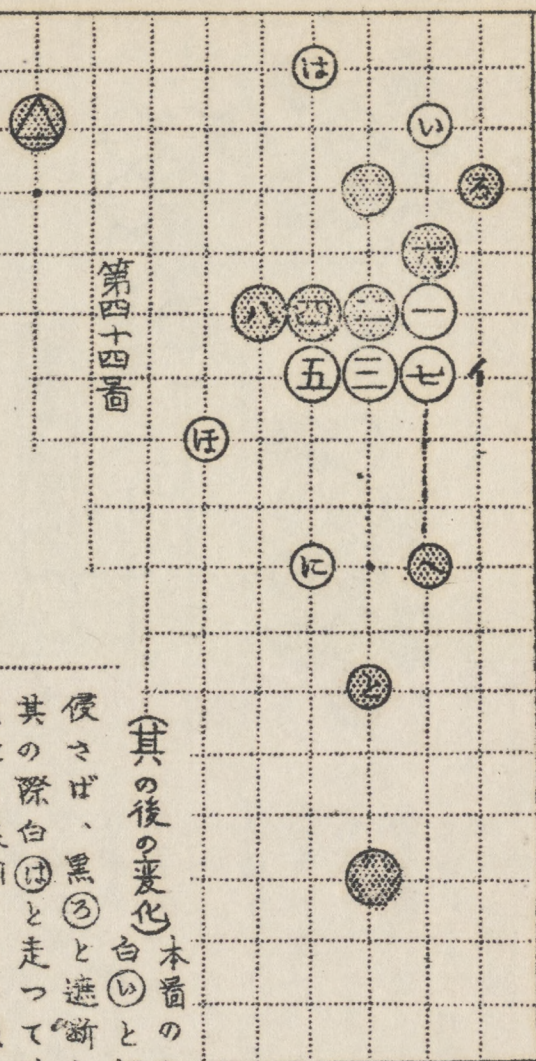
からず。四圍の事情もありますすが斯く白が直接に出截るのはマレでせう。





# 4 白五の外押

## 第四十四番



白五と外から先づ押すのは幾分下邊に向つて、廣く取らうといふ意があります。之に對する黒の應手は六の一手次で白はイと掛粘ぐ手(第四十五番)と本番の白七と粘ぐかの二途。  
單に白七と堅く粘ぐのは後に隅に味を残さうといふ意です。黒八の行は第

## 其の後の変化

本番の如き布置に於て白①と打込んで三々を

四十二番に於けると同調。  
黒八迄を手止りの定右としておます。

侵さば、黒③と遮断してもよい。  
其の際白④と走つて活を策し同時に黒地を蹂躪する手順です。  
斯く隅を侵せられた以上、黒は⑤と迫り一以下七までの白四子を攻め且つ右下隅の拓きを兼ねる⑥と云ふ手順になります。白⑦なら黒⑧、或は⑨の手で⑩と斜走すかです。  
註 △印の上邊星下黒は、白が隅の三々を侵す前提として、上邊に假定の布石です。布石(△印)の無い時は白は三々を侵す要はないのです。



第四十四番②

右側邊に△印白の備のある時。

本番の如く黒二と抑へて以下黒六迄の應接に従ふのは簡單でよい。

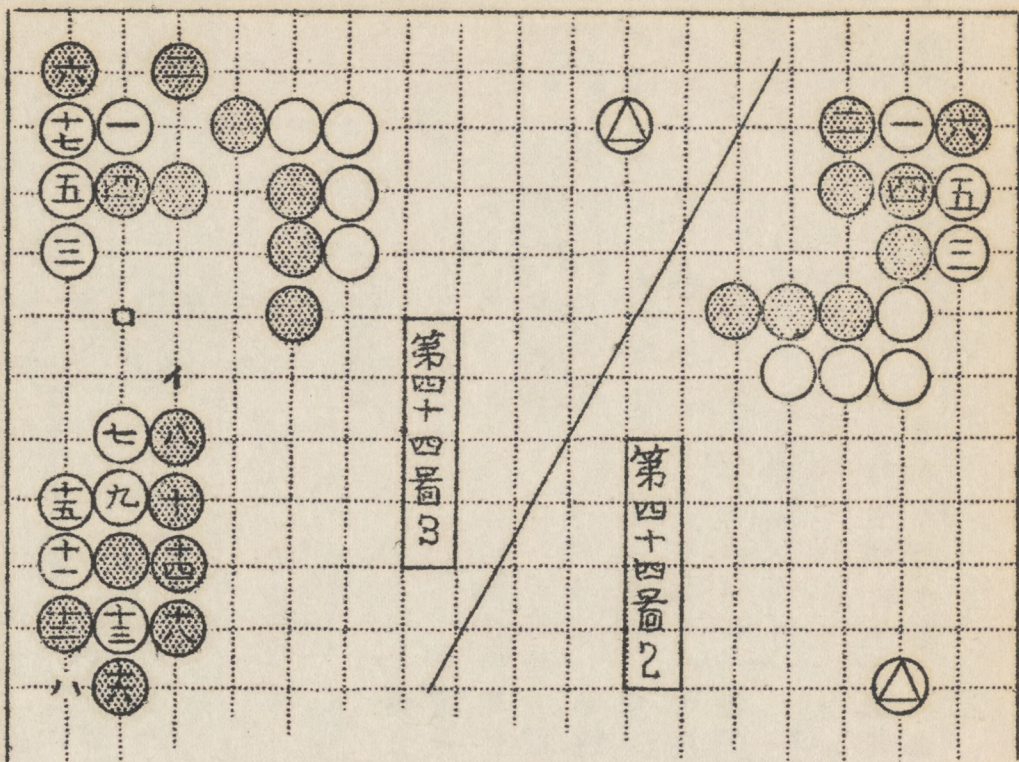
③番

に於ける黒二と遮断するの任意です。

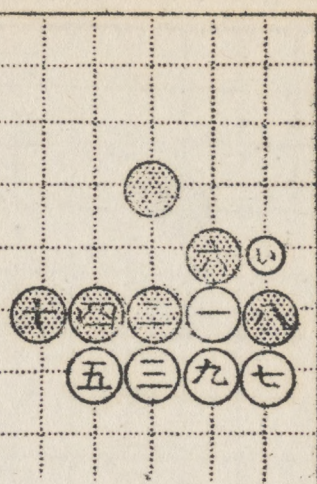
第四十四番②

第四十四番③

白七と外部に轉じ活きを築いた時に黒は八と迫り白を低地に壓し外部の廣壯を計る考へです。白九で(イ)と縛ねる変化もありますが其の時黒十と引くと、やはり(ロ)の真より覗かれるキズがあり中原に脱出は出来兼ねます。本番の十、十二の手は酷しくて良しい。白十五で(イ)と抱へると隅と振替りとなります。本番の黒十六、十八で黒八の主首の完成となりました。尚多岐に及ぶ変化はありますが②番に於ては幾分かの不利を忍んでも簡明です。







第四十五番

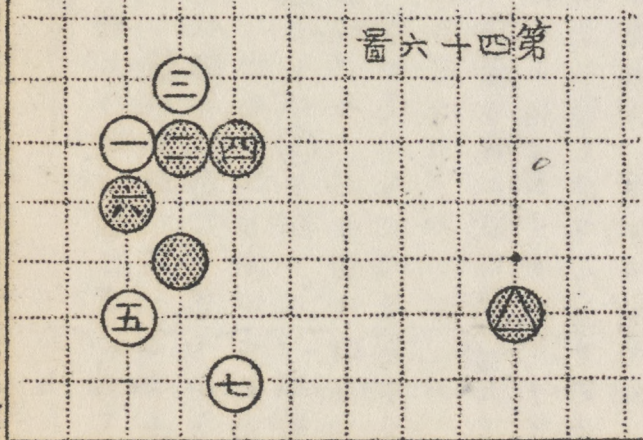
第四十五番

本番の白七は本手で、黒若し手拔すれば①と縛ねやうとの含みであります、黒に八とマテさせ九と粘いで、茲に白の堅壁が出来ました。黒十は最も大事な行びで本番に於ては前番の如き隅に於ける味は今の所はありません。

5 白五の三々打込

白が三々を侵す意は下側星下邊方面に、

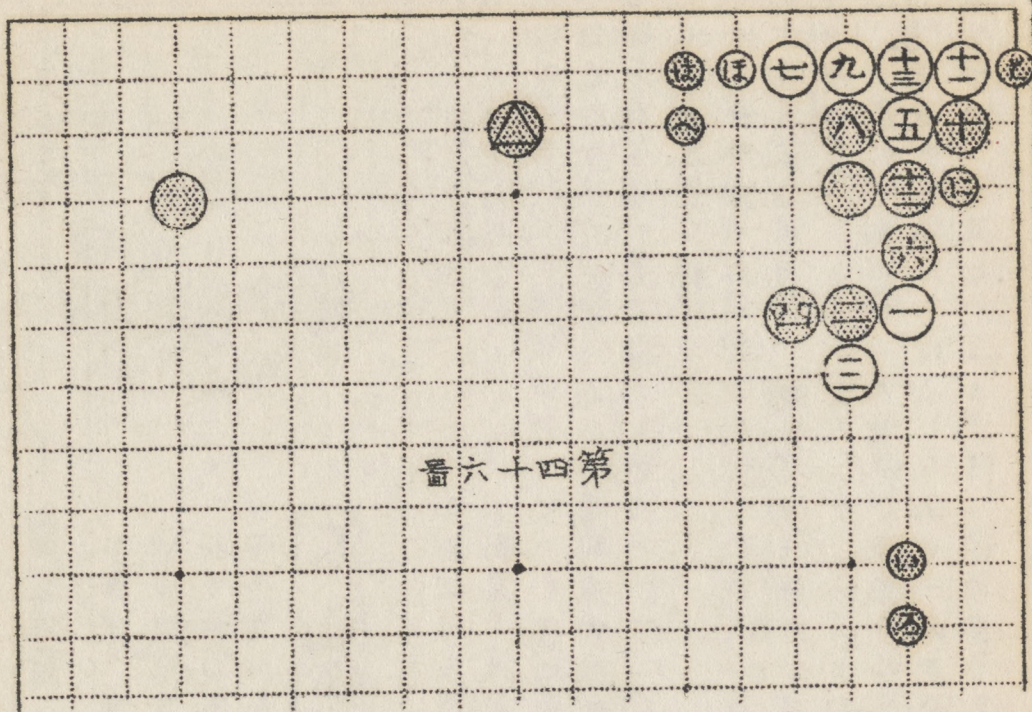
第四十六番



△印の如き即着の布石があつて、今迄の定石に従へば△印と共に下邊に黒の大領域の出来易い形勢の時、之を破一策で白五と迫るのです。白七の走りは其の主旨の継承です。白七でイと粘れば前番の変化と大差ないのです。黒六は正當なる應接、側と隅とを隔て、攻める此の一手です。

△註 單に下側方面の黒模様を破壊するといふだけの意味ならば必しも五の一點とは限らぬのですが、白五は一三と密接な關聯的着手です。



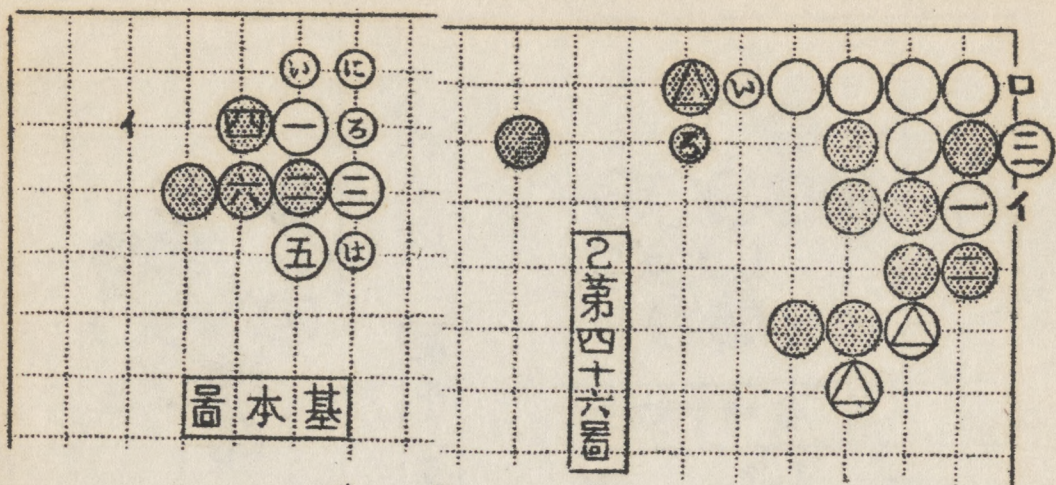


前圖より

白七の走りの時、黒は直に八と出て白九と盤つた時、黒十と夾み、白十一の縛ねに應じて黒十二とアテツケ、白を十三と粘がせておいて、若くはの點から、姿勢の未だ整はざる一三の白に迫りつ、右側に我が雄大な地域を劃する策戦に出る可きです。

尚、本番の後に於て黒と下側第二線から迫るスチがあります。勿論局面に急を要する處があれば別ではあれど、普通の打着點よりはと行く方がよろしいのです。黒の時白が手拔すれば黒と粘がれて隅としては治はありません。白が隅を凌ぐため黒に對し白とツキアタリ黒と立つものと假定し、其の時白手抜きすれば、今度は黒に隅へ縛ねられて、今劫争とさる、棋があります。





## 頂抑

△註 尚白より①とツキアタリ黒③の時白一と當て  
黒二の時手を抜く事が出来ます。

右上隅の白が安定せぬ限りは、此の附近に於て白は何等の策動も出来にくい。で隅の安定から言へば白一と截り三と抜く手があれば、之は後手なのです。其の上自然の結果として黒二の一子が右側△印二子の白を甚だしく脅威する事となります。要するに左上の△印の黒の意は、白に一、三と運ばさうといふ意、黒に△印と打たれた代償として打つ隅の一、三は白として非常に不利な交換、其の故は、黒△印の一子は色々ハタラキのある一子であれど一、三の二子は色々に隅を活きたといふ以外は何等の意味をも齎（あた）らぬ手だからです。

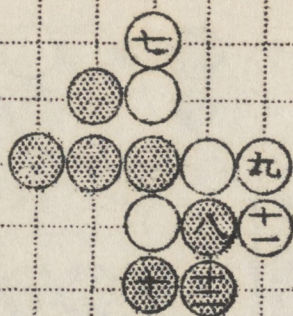
黒二と頂け四と抑へる、之を頂抑へと云ひ、頂行の場合中原に向つて發展す可き五の點を此く白から打撃されて六と粘いでしまふ姿勢が、極めて勢力重複に陥つてゐる事は一見明瞭、即ち此の形は基理より觀て不利なる事は説明を俟たぬ處であります、が然し實戰に於て、(次頁へ)



第四十七番



第四十八番



白七の着点

- 一、①の下り(隅を侵す意を含み)
- 二、②の下粘(五の子を取らぬ意)
- 三、③の上粘(黒の安壯を妨ぐ意)
- 四、④の掛粘(眠形に資する意)

以上四種に分け説明をして行きます

場合と策戦の都合上往々用ひられる手  
即ち白よりイと三々を侵されるのが  
嫌とか云ふ場合(第四十六番の如し)  
又、四囲の白が強固なる時に黒が早く  
隅の安定を計らんとせん場合。  
又、白軍の拓きの窄い場合白の勢力を  
重複せしむ目的で行ふ。

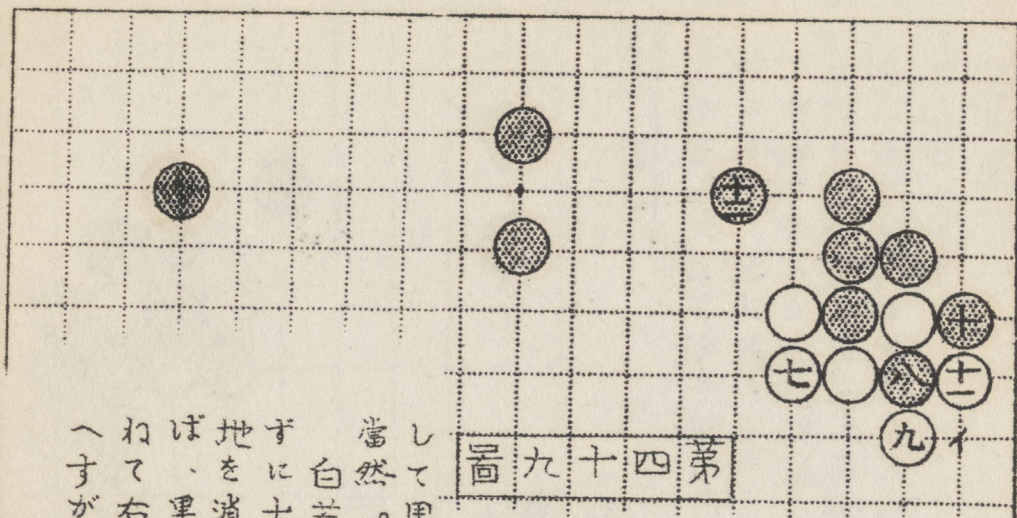
第四十七番

第四十八番

白七と下りました時黒八の截りは必要  
白九の行は、此の點を黒に叩かれめ用  
心です。  
白七の粘に對して黒八の截は右側の場  
合にも依ります、星下十一の點に若し  
も既着の白の配石がありますと黒十と  
行びても威壓が利きませんから、溯つて黒八の截  
る手がイケない。で單に十二と備へるべきです。  
白七と粘ぐ意は△印を取らさないと云ふ意を含ん  
で居ます(黒八と截らば白九と伸びて戦ふ意)

以下三月号へ





第十四圖

して黒十二の應接は當然。  
白若し十一とアテず  
に十二の點に黒の地を  
消して来たならば、黒は直にイと縛  
ねて右側の根據を顛  
へすがよろしい。

基本圖

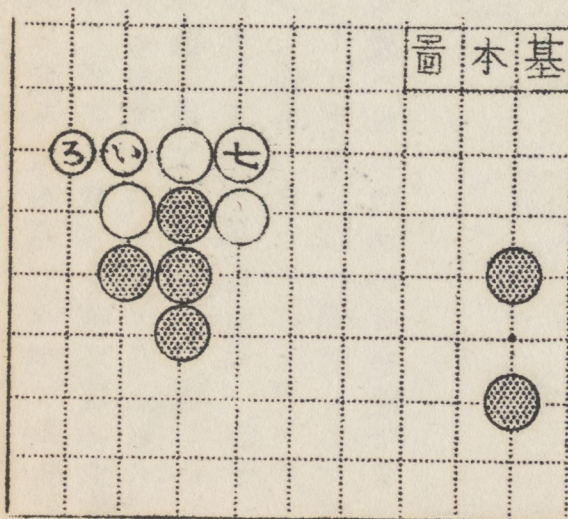
(左下置)

下側中邊の黒を手厚くさすまい、と考へた時、白七と上粘  
ぎをします。(例へば本圖の如く  
中邊星あたりに配石などある場合)  
其の時黒は、と截る手と、と置く手  
との二途。

第四十九圖(上圖)

とアテるか、或は十二の點に斜走して

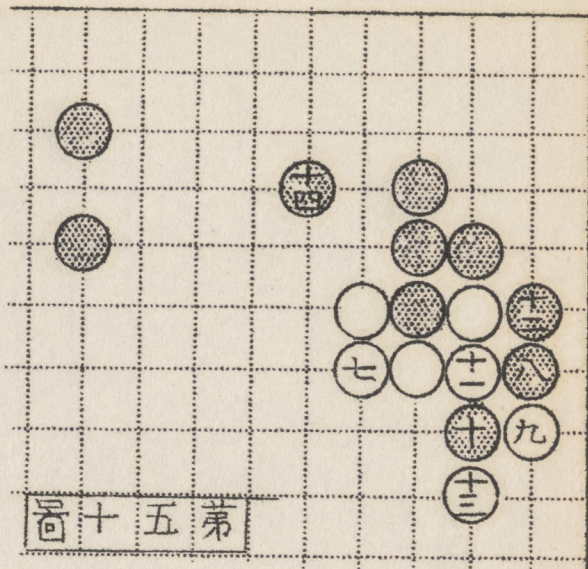
基本圖





第五十番 二

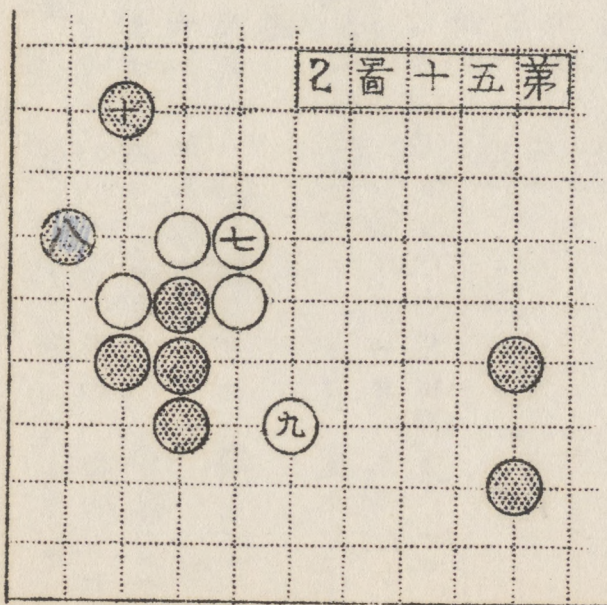
白若し九と下側を消して來ま  
たならば、黒は直ちに十と飛躍し  
て左側に於ける白の根據を未成に  
妨げると同時に之を我地域とし上  
側に於て白九の代償を求めること  
になるのです



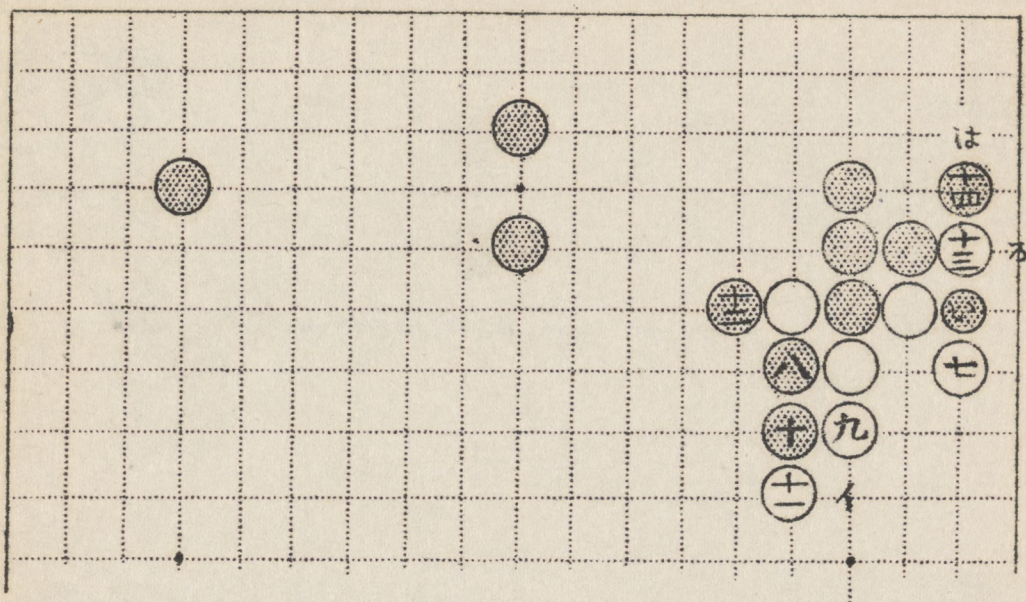
第五十番

黒八は手筋で、十一の截と  
十二の盤とを見て居ります  
白若し九の手で十二と盤りを止めれば  
黒十一と截るは勿論。白九は軽く捌か  
うといふ意、黒十と縛ね出し、白十一  
の時十二と盤り、白に十三と抱へさせ  
(白を重くして置き) 征を保留して十四  
と下方を整へたのは巧妙な手段です。

第五十番 二







# 第五十二圖

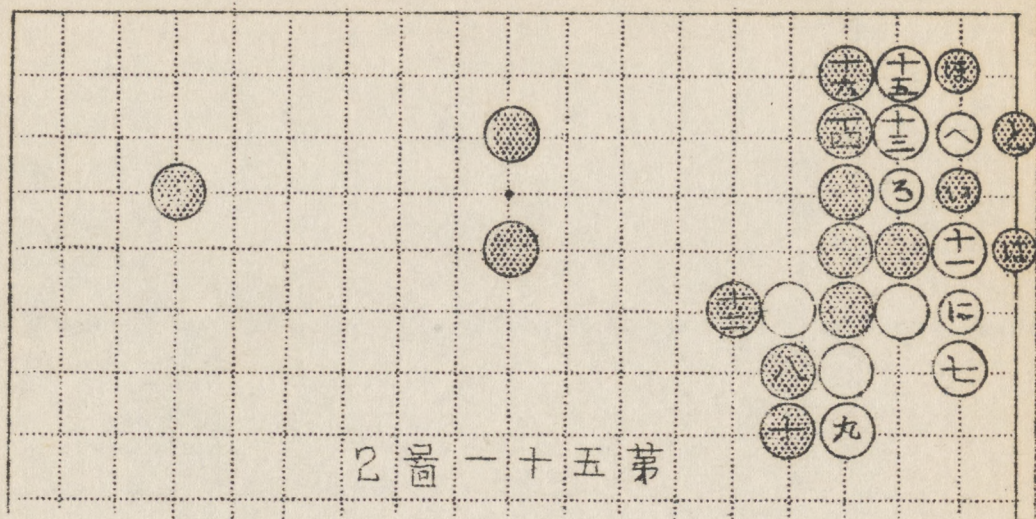
白七は隅へいと縛ねよう  
といふ意味を含んでゐま  
す。

黒は直ちに八と截るがよろしい  
白九は此の點を叩かれては非常に重  
復の姿勢に陥りますから其を拒い  
たのです。次いで黒は十と押すか。十  
二と抱へろか。とアテルかの三途。  
黒十と押すのは征に取らるゝ手を凌  
ぐと同時に左側の白に迫りつゝ中原  
を宏壯にする手段です  
次いで白十一と縛ねるか十三と隅へ來  
るか其の何れたるに論なく黒は十二  
と抱へろがよろしい。

白十一と縛ねた時黒は十二と抱へ  
て茲に下側右方の黒地は相當に宏  
壯の地域を劃しました。次いで白十  
三、黒十四は當然の應接

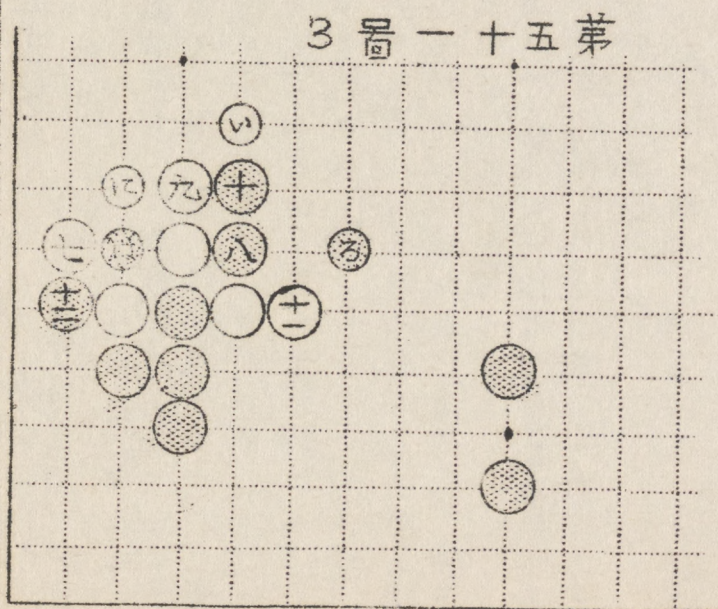
△註 本圖はイに斷點があり、  
又隅は○のパネが利く故は○の  
夾を豫防してゐます。





2番一十五第

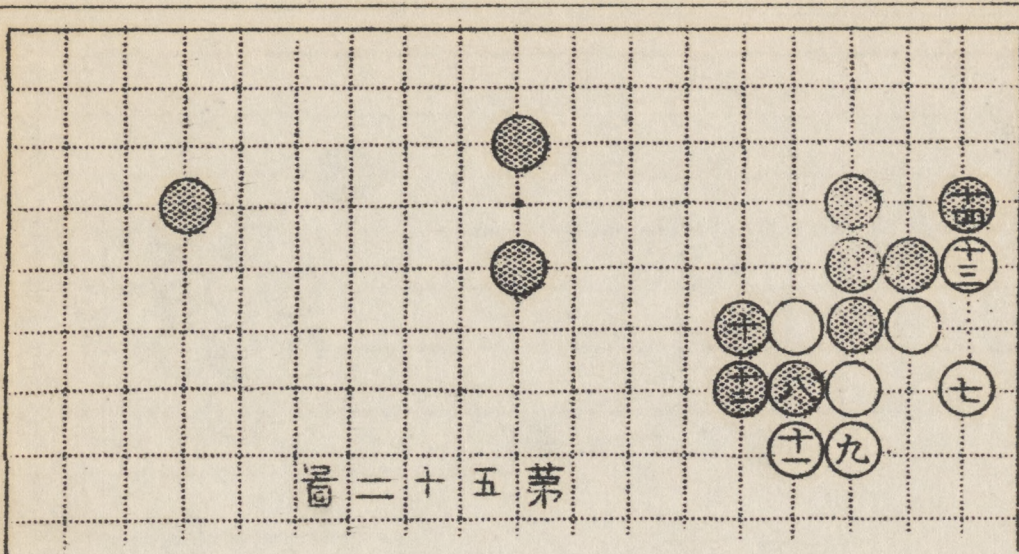
2番一十五第



3番一十五第

白十一に縛れた時も黒はヤハリ十二と抱へます、次で白十三と打込めば黒十四、白十五、黒十六と抑へておきます。本圖の後、黒十七、白十八、黒十九、白二十と劫味があります。





### 第五十二番

黒十と押した時、白或は十一と立つかも知れません。

其の時の黒の應接として、左側を十二とアテておく手順が大事です。

次いで白若し①と締めて来るならば、黒は②と飛ぶ手になります、黒の手が隙いたら左側を③と打抜くのがよろしい、其の時白が④と抑へるは議論のない手です。

### 第五十二番

前番に於て黒十と伸びて、白に十一と立たれるのを嫌ふ際、黒十と抱へます。白は直に十一とアテ、先手で茲に一勢力を加へておいて十五と隅へ締めて黒亦十四と抑へるのは決手。



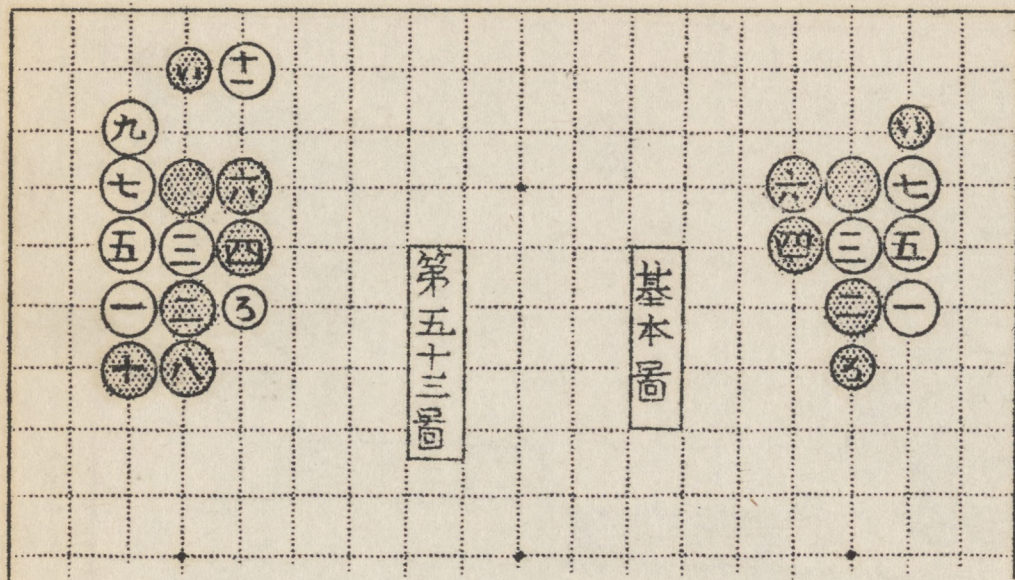
第五十三圖 白三の緯込



第五十三圖

白三と緯込む、其は左下隅に白の配  
石がありて征圍係に有利なる時に、  
即ち黒四以下七迄となりた時、黒二  
を征にして取り得らるゝからです。  
既に征として取れる黒二を何故白九と後手  
を引いて取つたか、其は九と打ち抜かず  
おくゝと黒より色々策動される、即ち対隅に於て  
色々と不利な征待を打たれる。  
征が不利なるのに黒四と何故打つたのか、其  
は右側中辺に於て(は)若しくは(に)布石がある場  
合です。  
白(は)若しくは(に)等に既着の白の配置のある時、  
白七、白九と打抜いて右側の拓きとして極  
めて狭隘であるからツマラズ、之に反して黒は  
先手で八と走り、隅が治まると同時に右方への  
發展も出来るからです。  
征も不利、黒二と打抜れるのを嫌ふ時は、  
次番に従はねばならない。





### 基本番

黒二を征に取うるゝが不利ですから、四と外から抑へました。黒六の手で七の點に抑へますと、白に六の點を截られて紛れます。

白七は●の點に緯ねる第五十四番の方が白七で緯ねるのがよろしい。本番の如く七と行くと●と●と両方を擇ぶの權利を與へる譯。

### 第五十三番

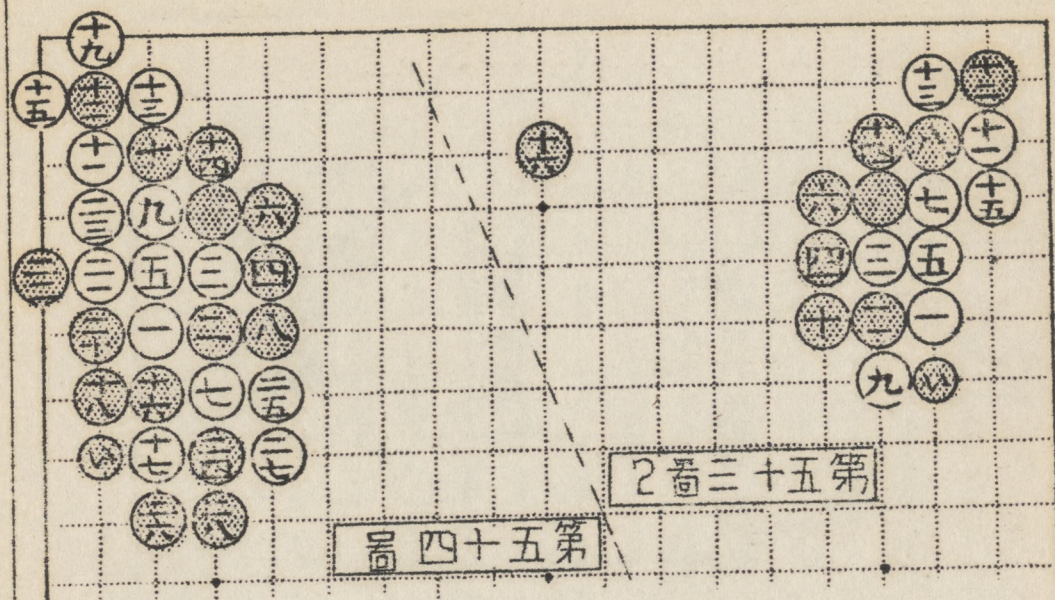
●黒八と行くのは左下隅を手厚くせんとする意圖の時です。

黒十は八の繼承です。

白十一は黒から●と迫られる豫防を兼ねて右方へ進展する意。

本番に於て白は隅を侵略し相當の實利は得ましたけれども、黒又左下邊に於ける厚味、又中央に勢力を得て居ます。但し●の點に斷點があります。





第五十三局

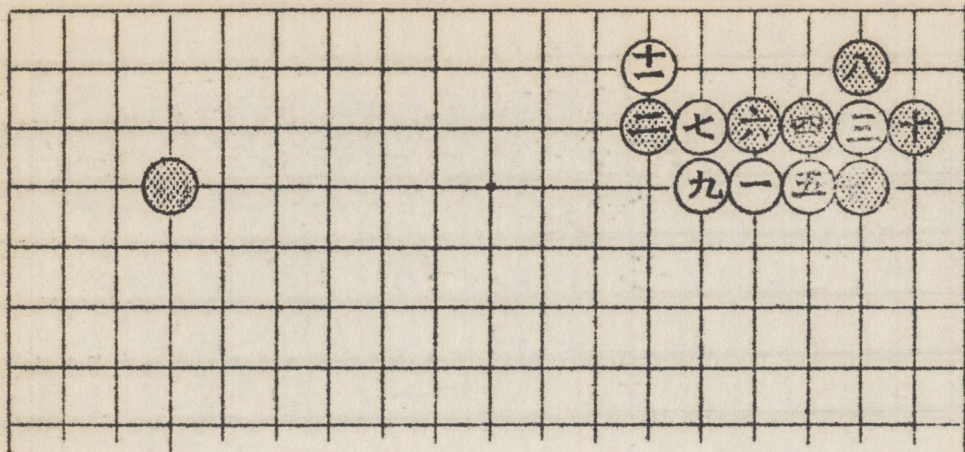
白九は先づ外部の黒に一撃を與へて  
 茲に一勢力を加へて置き、白十一に對  
 する黒十二の二段緯ねは●の截を狙つ  
 た手で次番の如し。  
 白十五の堅固に對し、黒は上側に、  
 十六と大模様を割します。

第五十四局

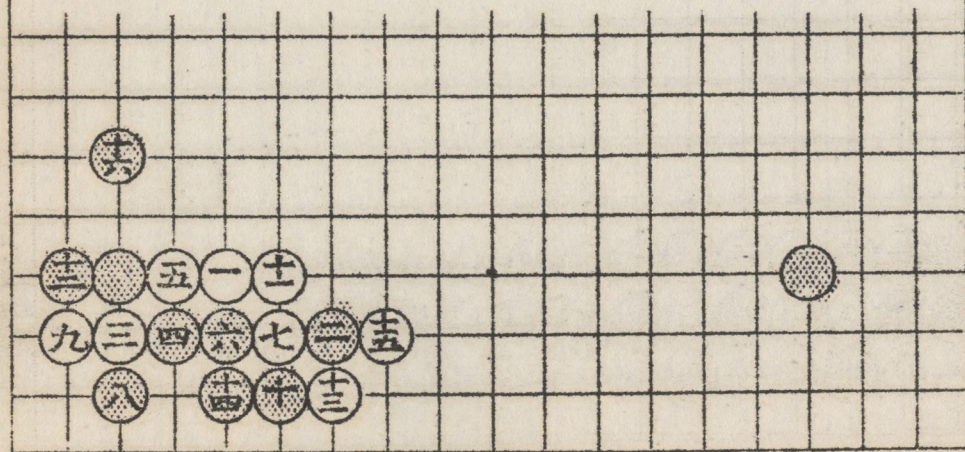
白十五と黒十二の一子を  
 取りに來りた時には、  
 黒十六と截るのがよろしい。  
 白十七を打たねば黒は二十四と征  
 に取るか、或は十七の点に行びるか  
 の二途。

黒二十、二十二は先手で白の利を  
 削る意、二十四の手で二十六の点、  
 又は●の点から迫る手段もあります  
 が本番の二十四とするは以下手順は  
 簡明です。





(第六十九圖)  
 黒八と、この方に當る  
 変化、白九と粘げば、  
 黒は三の一子を打抜い  
 て宜しい。結果は、こ  
 の一局部で言へば、先  
 手角です。左下隅、白  
 九と下りました。切れば、  
 黒十で十一に降に歸著  
 第六十四圖以降に歸著  
 します。十と下から盤  
 外に十六迄は必然の經  
 過ですが、これを第六  
 十七圖の餘韻を存する  
 に比して、隅には白が  
 う何の組ひも無い矣は、  
 黒が幾分優つてゐませ  
 う。形の十六の飛が働いた  
 形に就いては、前に言つ  
 た注意が必要です。



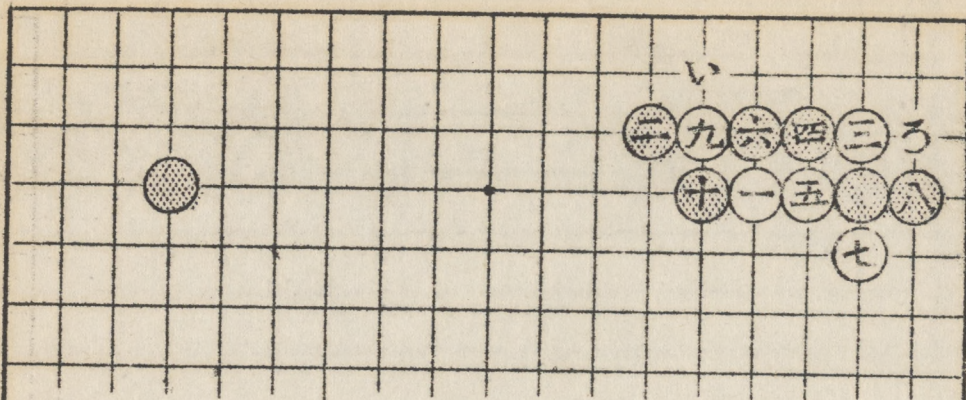




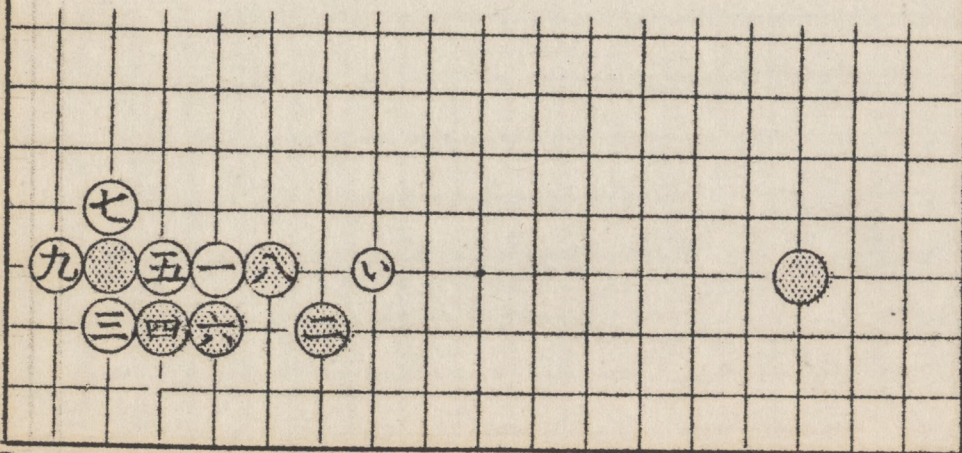
第七十圖



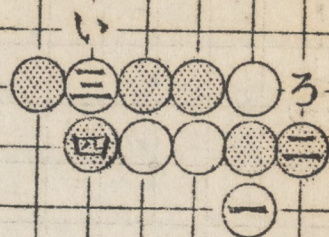
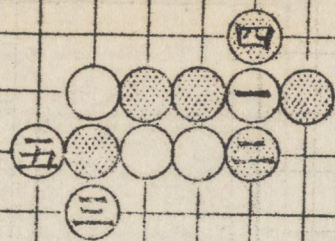




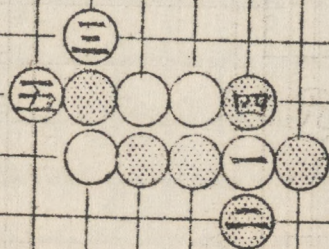
(第七十一圖)  
 白七と二の方から當る型。  
 黒八は絶對です。  
 白九と緯込んだ時に、黒  
 が十の手でいと下から受  
 けるのが悪い事は第六十  
 六圖で言ひました。  
 十の次に白がいに下れば  
 第六十一圖以降、又いに  
 下らずるに約へれば、第  
 五十八圖左下隅以降に  
 ります。  
 この事は次圖の説明と共に、  
 最も深く留意すべき  
 であらう。左下隅、黒八と  
 かくれて白に九と打抜か  
 れては大変です。白の形  
 が完全なのは比して、黒  
 の姿勢は如何にも薄い。  
 後に白①と迫られる痛烈  
 な手段もあります。



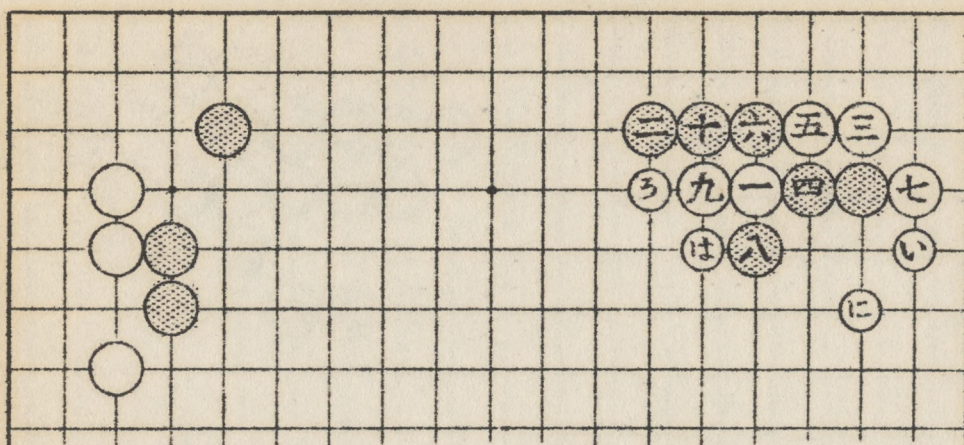




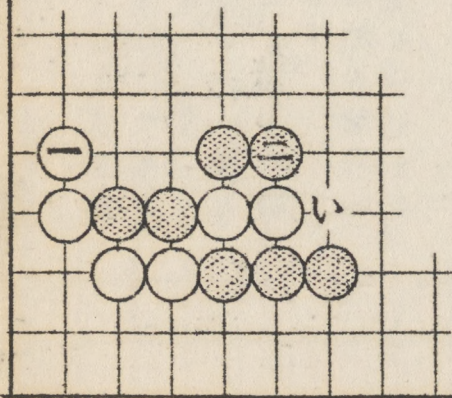
(第七十二圖)  
 右、上隅、黒二と必ず下る  
 べき事、又黒四の次に  
 白が、い、何れに打つて  
 も、既述の型に歸する事  
 は、今言ひました。  
 左、上隅及び左下隅の結  
 果が、局部としては互  
 角で、す、れど、分り易  
 いだけに、而も先手で  
 はあるし、黒が稍優つ  
 てゐる事も前に言つて  
 置きました。こゝに於  
 て、善悪は兎も角とし  
 て、その分り易い型に  
 導かれる虞、此の無い爲  
 には、右、上隅、白一と先  
 づ、この方から當る手順  
 即ち前圖が用ゐられる  
 べきである事を知らる  
 す。



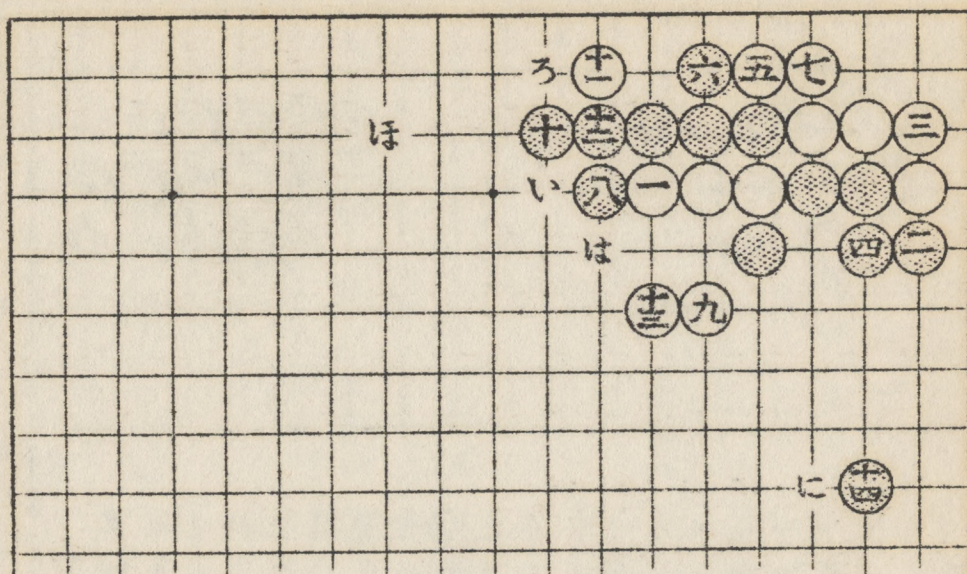




第七十三圖  
 黒四と突當る型。多くは黒が不利です。それと突當る手が俗筋で面白くありません。矢張り前圖迄のやうに五の裏に繰出すが宜しい。以下第七十七圖迄は參考の爲に掲げます。黒八で誤つて①に約へると、第七十七圖の如く支離滅裂に到る。黒十迄は必然と觀うれますが、②で白の打方に③は④に⑤の四様有り、順次示す通り進出します。左下隅は白が二子を捨て側辺に進出しました。取る事が出来れば、黒も大して悪くはない。從つて黒は初めにこの征の成否を見定めるの必要があり、なほ二はいりません。抱へるのと、征が兩つ有ります。其の注意すべきです。

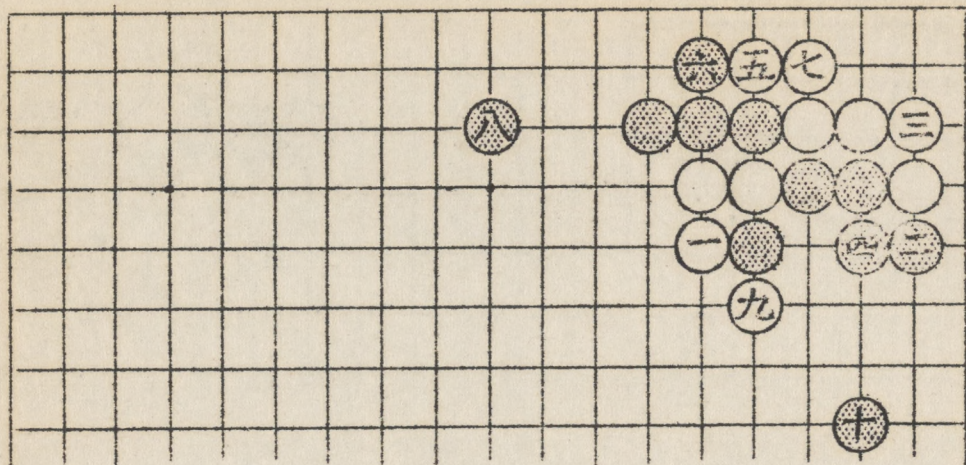




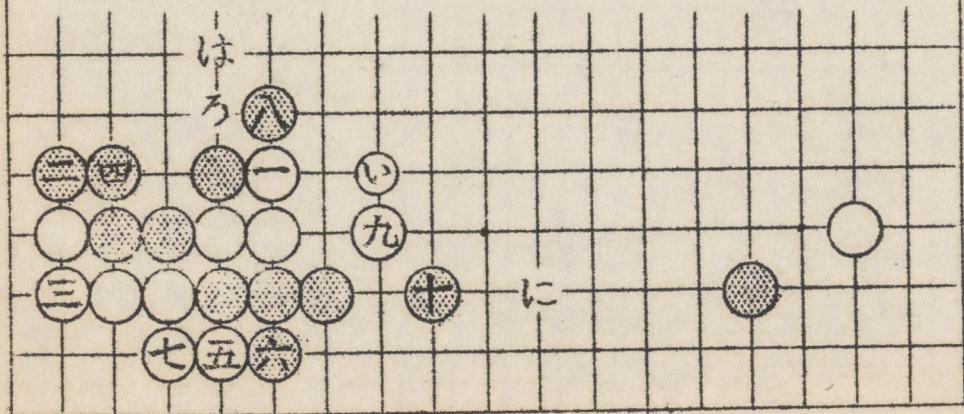


(第七十四圖) 白一と押す変化。前とは方針を異にし、二子は助けて黒を二分して戦はうとします。黒十をいに並ぶ方が良い事も有りませう。左上方面との關係の如何に依ります。白十一は斯る形に於る常用の著理であつて、黒の眼形を先手に奪ふのです。これに對して黒十二をろに應ずれば、忽ち白にはの緯を利かされまますから、その不利は申す迄もありません。黒十四は白かうにの辺に迫られる手の詰へですが、次に白に攻立てうれれて六以下の石を攻立てうれりやうに左上隅方面の配置が白に都合に出る結果は當然黒に面白くないといふ事が言へます。

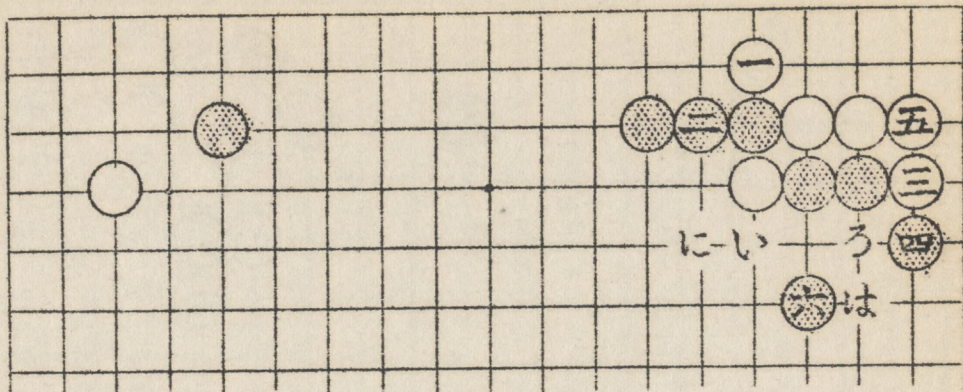




(第七十五圖)  
 白一と曲る手も前圖と  
 大畧同意味です。  
 黒十迄は必然と觀られ  
 る。この結果などは、  
 黒として最も無事に屬  
 するでせう。  
 左下隅のやうに、實は  
 黒八と一つ縛れた處  
 ですが、白に九と飛ん  
 でゐるに、却つて困  
 ります。  
 即ち黒十の次に、白は  
 ①に並ぶ位のものです  
 が、今度白からろに切  
 られると拙いし、さり  
 とて①に次いで黒がは  
 の鼻を補ふのでは、白  
 にと迫られてこの方を  
 攻撃される。  
 黒は右上隅の機當に従  
 ぶべきであります。

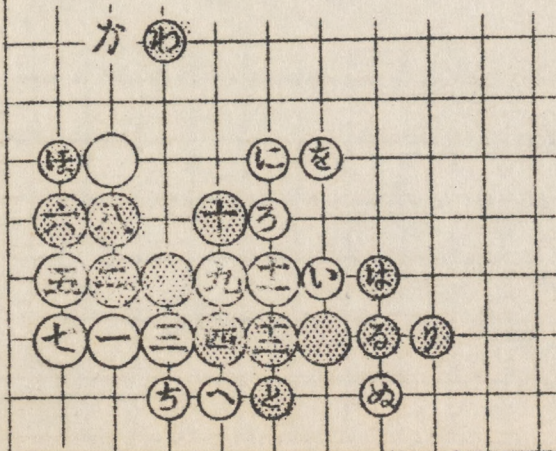




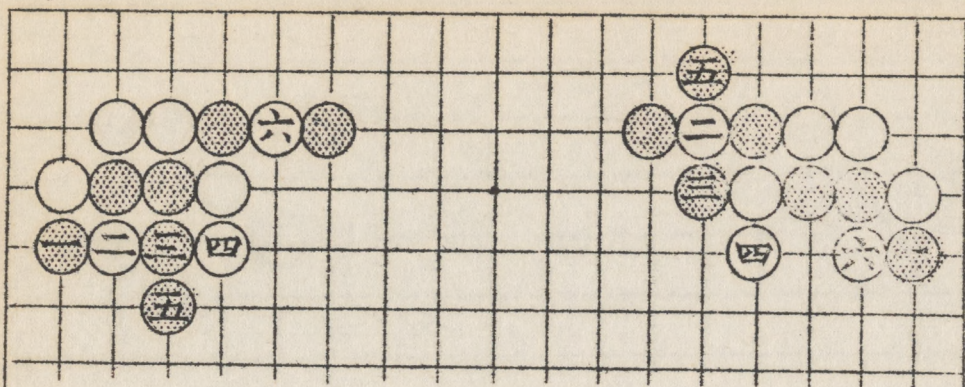


(第七十六圖)

白一と當て、そして三五と練ね粘いでゐられ  
 るものとしてみても、この形は黒が不充分です。  
 黒六をいに抱へれば、白は勿論直にろを切る。  
 六の手で又ろは等に粘ぐのは、白いと行ひろ  
 れて、これも黒に良い筈が有りません。  
 六と飛ぶ形ですけれど、後には黒は結局に位に  
 補ふを要し、而もそれはにがい、そして六  
 がはにある姿勢の完全なるには、遠く及ばな  
 いのです。  
 置碁に出来る左下隅黒  
 十二迄の形に於て、次  
 に白が①③何れかに押  
 したのが、前二圖に類  
 似してゐますが、假  
 に白①黒③以下順次に  
 黒②④⑥に打つ事もあ  
 る、迄となるものとし  
 て、前兩圖の黒の不  
 利は疑ひ有りません。

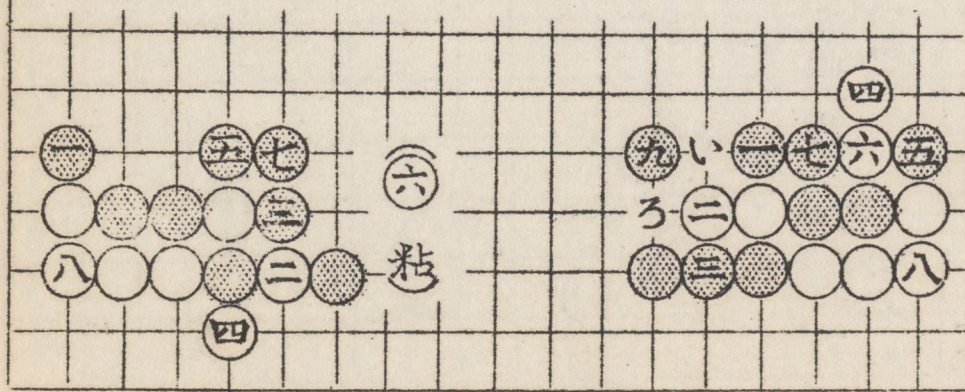




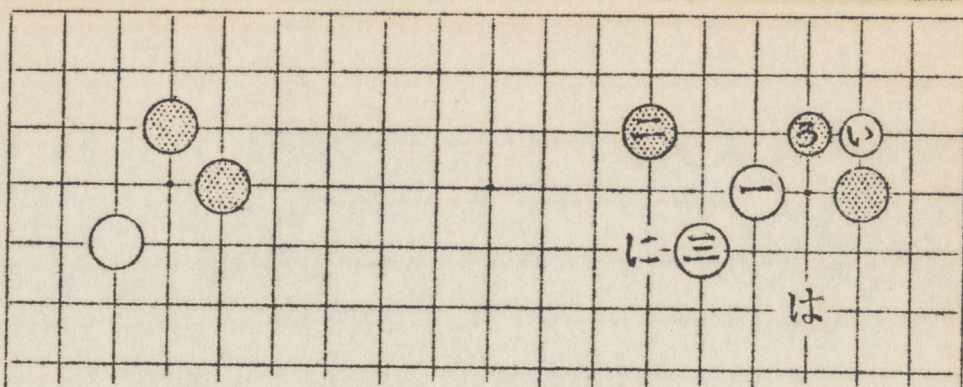


(第七十七圖)

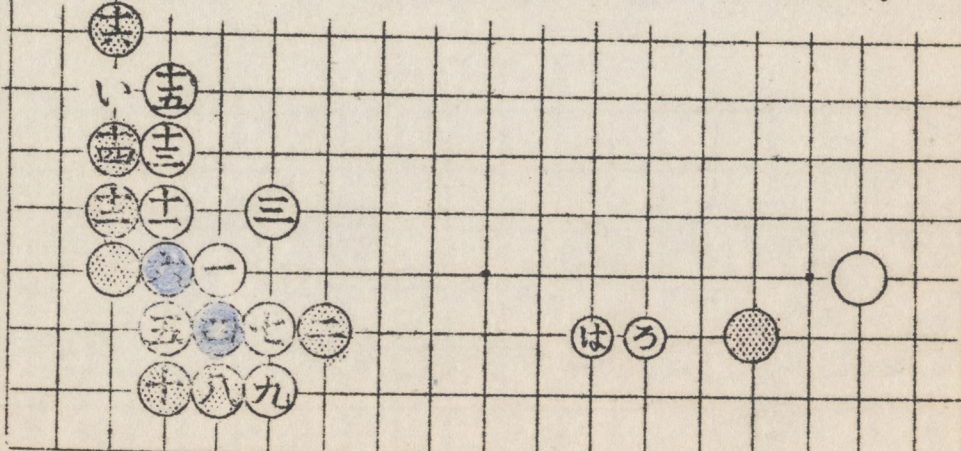
黒一と誤つて約へると、  
 白二と緯込まれて窮しま  
 す。以下白六迄となつて  
 は、論外でせう。  
 左上隅、左下隅共に説明  
 の限りではありません。  
 右下隅は征關係の白に有  
 利なる場合、即ち黒はい  
 る何れかう當ても征に取  
 る事の出来ない時ですが、  
 白四と進出され、後手て  
 九と補はざるを得ないに  
 到つては、その損害は莫  
 大である。  
 兎も角も第七十三圖の突  
 當る形が俗筋ですかう、  
 どの道黒に良い結果は期  
 待されぬのが當然でせう。



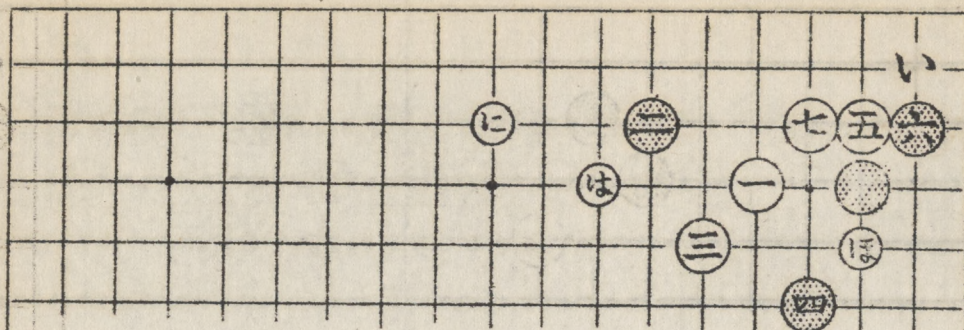




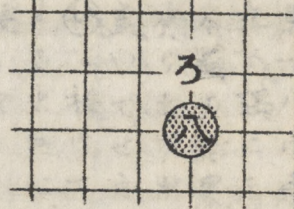
第七十八圖  
 白三と尖む型に移ります。  
 斯く尖むのは、従来のや  
 うに①に頂ると黒②と緯  
 出されて面白くない場合  
 と観る事が出来る。斜  
 走するのに対して黒はに  
 と、兩様の應手を持ちま  
 す。  
 左下隅は参考までに示す  
 のですが、黒四と直に頂  
 るのは白に五と緯出され  
 ていけません。  
 白十一・十三が酷しい。  
 黒十六もこれを急つて白  
 いと約込まれては忍び難  
 い處。  
 次いで白に下辺③或は④  
 と打たれる事になつては  
 黒明瞭に不利です。



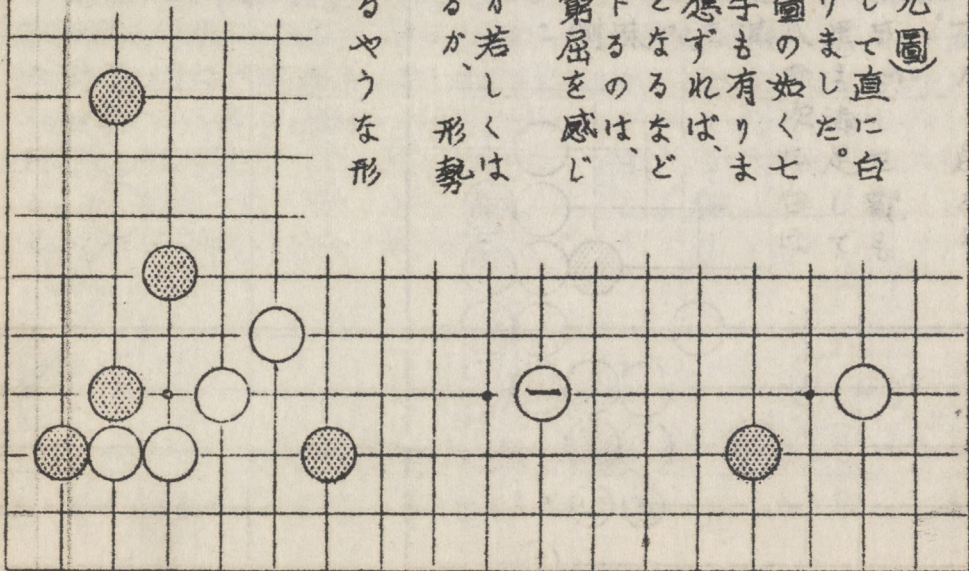




普通でせう。白にろと迫る。八の次に白は(は)に掛るか若しくは上(上)の(に)の方から夾撃するが、形勢に從つて選擇する。然し下(下)辺白一と打たれるやうな形勢にあつては黒が厭(いと)でせう。即ち斯る場合に黒の六と受ける手があり。如何かといふ理になります。なほ後に白からは(は)に夾む粗(あら)ひが残る。



(第七十九圖) 黒四に對して直に白が五と頂けました。黒六で次圖の如く七に緯出す手もあり、また六と應ずれば、圖の八迄となるのは、八をい(い)に下るの(は)は、白に窮屈を感じ

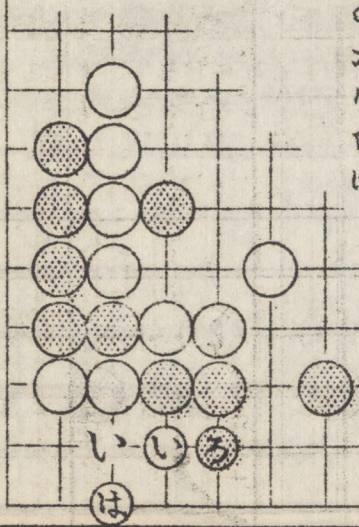




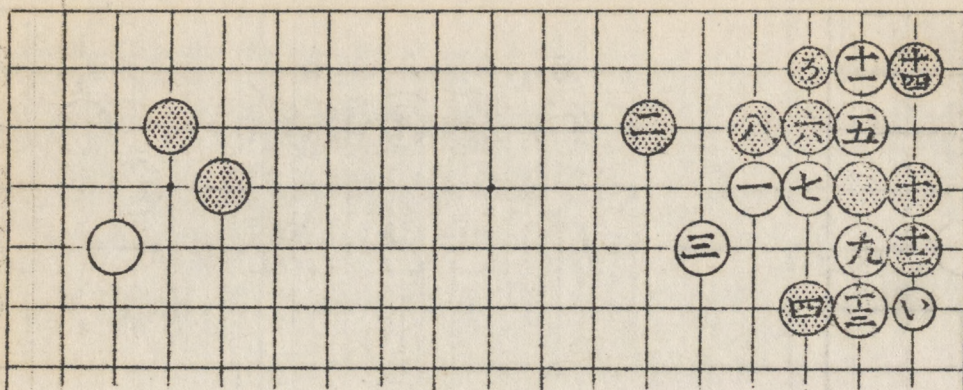


第八十圖

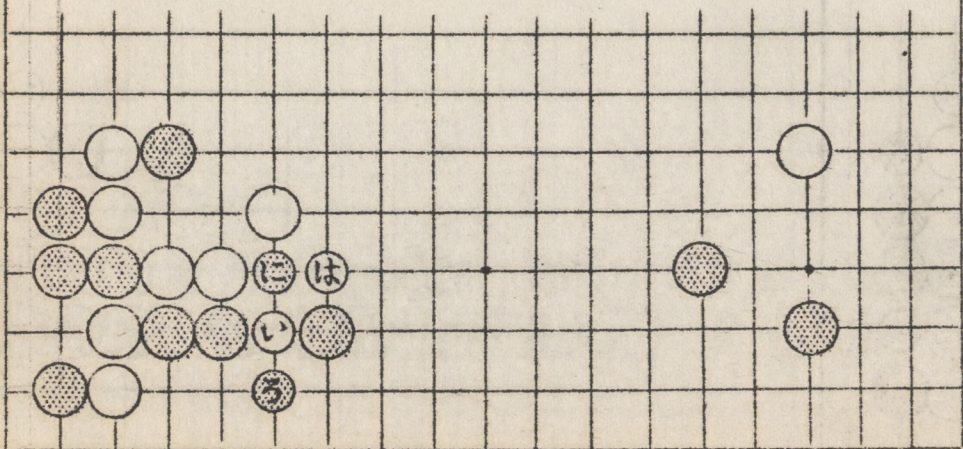
黒六と繰出す型。それとして黒十迄は必然の應接であります。白十一を次圖のやうに十八に下る事も有りますが、斯く十一と約込んだのは、この二子を犠牲に供して黒を壓迫する作戦です。以下十七迄は先づ絶對。黒十八は急を要せぬ様ですが、怠ると左下隅に示す不利が有る。本圖の結果は白の意匠が成功した觀も有りますが、實益を収めた黒も満足して良いでせう。而して黒十八の次に白は①に掛けて、黒の模様を削減すると共に、中原に形勢を張るやうな順序が想像されまふ。左下隅白①以下、の味も有り、自然黒の下辺右側に薄弱となる。白①でいにも曲る狙ひも有るでせう。



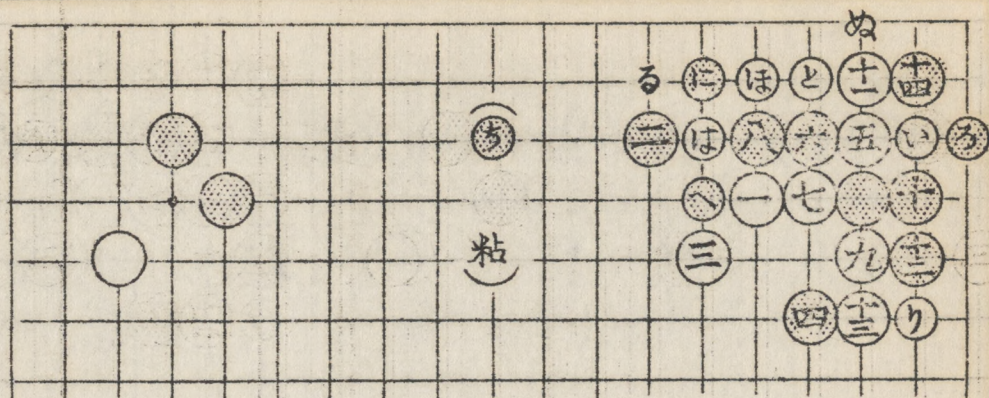




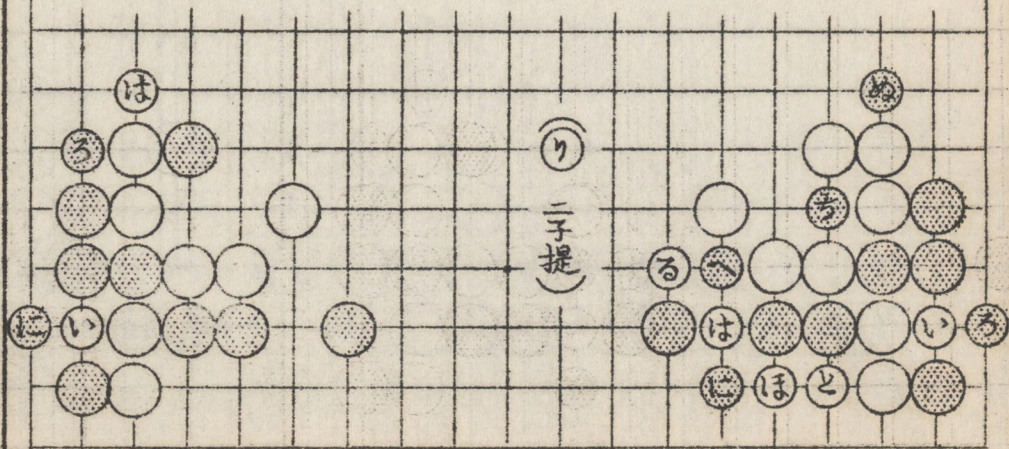
(第八十一圖)  
 白十一がう変化。  
 黒十四はこの隅を確保す  
 る心ですが白が①に約へ  
 て黒②と交換する事は、  
 隅の味を全然消滅して十  
 四の手を愈々有力ならし  
 めますから、容易には打  
 てません。左下隅の劫  
 の手段とは、劫争に敗け  
 て黒に①の臭を粘られる  
 と白は大きな疵を被らぬ  
 ばなりませんが、同様に  
 この劫争は黒に取つても  
 亦小さからぬ脅威であり  
 ます。若し白に相當の劫  
 立が多くて危険な際には  
 黒は右上隅十四の手で第  
 八十三圖の如く打てば宜  
 しい。



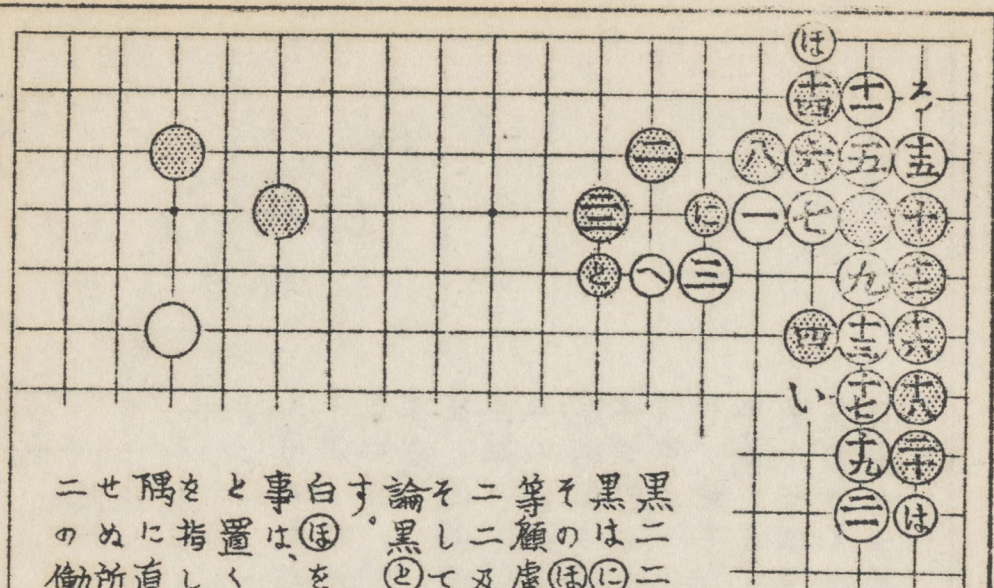




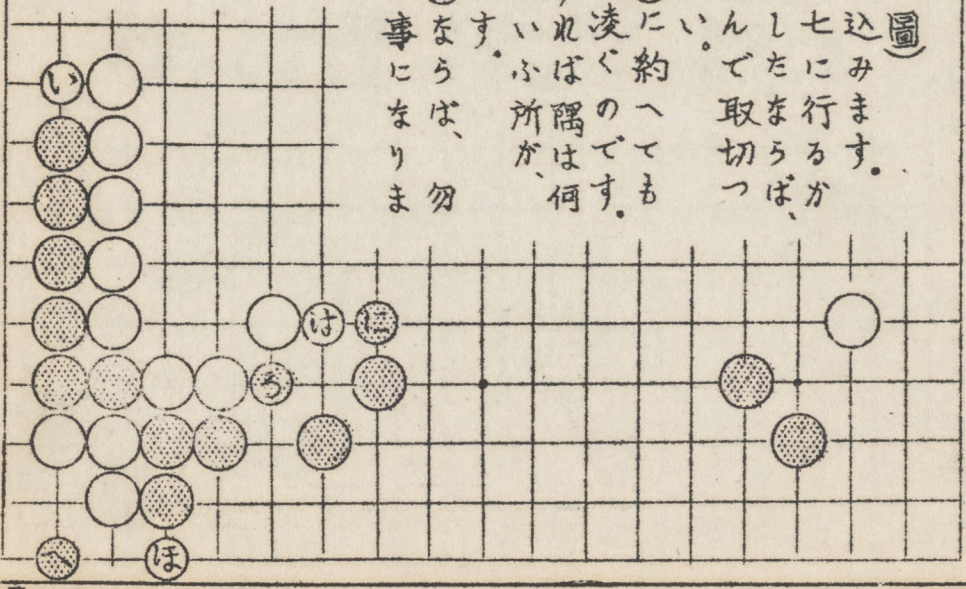
第八十二圖  
 黒十四の後、白いに出る  
 れた際、黒が誤つて、  
 盤と符号の示す手順で  
 白(り)造となり、黒が取る  
 の中、黒は(り)の手で、  
 へれば、隅は取る、  
 が、その代りに、白(り)に  
 白、上辺を破る、  
 充分、上辺を破る、  
 左下隅、黒(り)とこ、  
 泳ぐのが大切、  
 白(り)と黒(り)と盤、  
 右下隅の如く、振替、  
 も有り、黒不利、  
 は、明、白に黒不利、  
 採る譯に行きません。



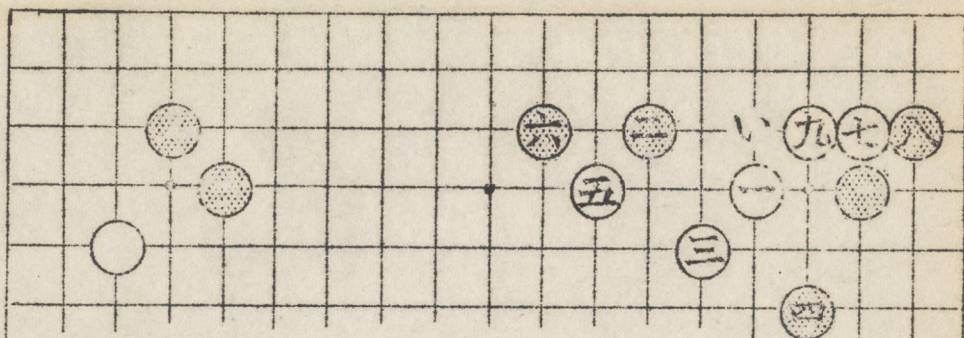




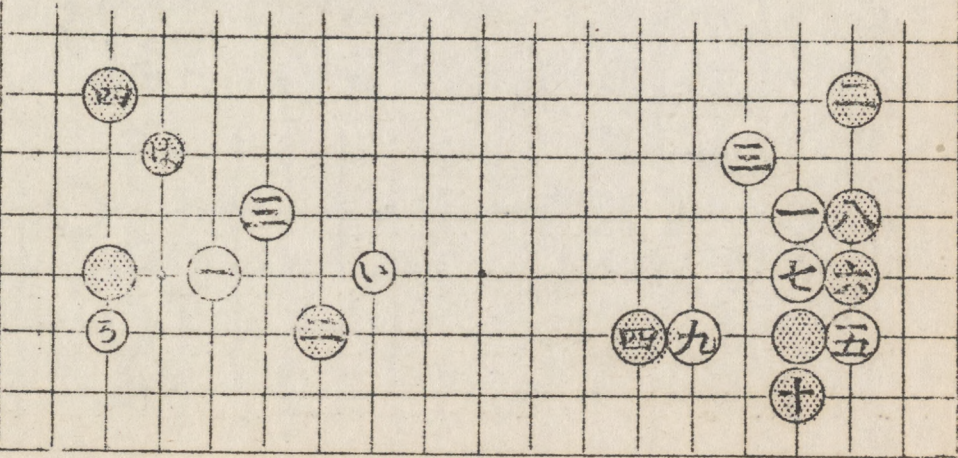
黒二二の後、白がはに約へても  
 黒はにと當て白ほを凌ぐのです。  
 そのほが凌げさへすれば隅は何  
 等顧慮を要しないといふ所が、  
 二二及びにの効果です。  
 論としてにの次に白へなら、勿  
 論黒とと押して打つ事になりま  
 す。  
 白ほを凌ぐと言ふ  
 事は、左下隅黒へ  
 と置く手の有る事  
 を指したのです。  
 隅に直接に手入を  
 せぬ所が右上方二  
 の働きである。







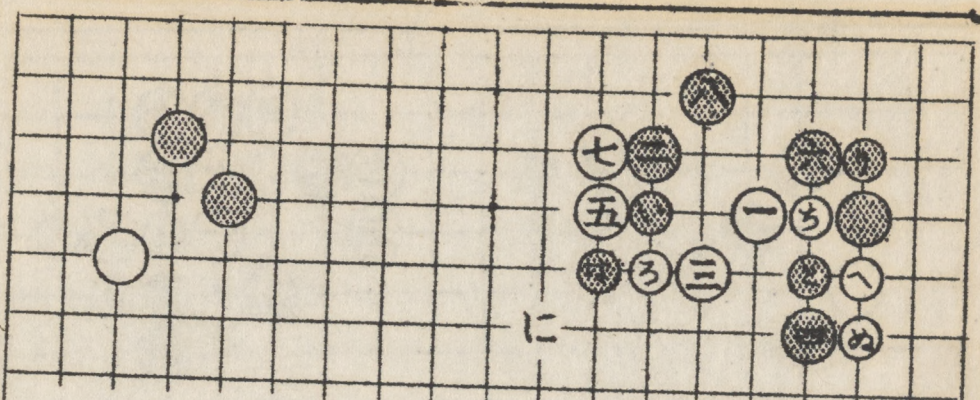
(第八十四圖)  
 白五と掛る型。  
 黒六は次に示すや  
 うに九の尖に尖む  
 かいに頂るが、そ  
 れ等の型の方が多  
 く用ゐられ、又優つてゐるま  
 すが、六と受けて以下十迄と  
 なれば、略第七十九圖に歸著  
 する。  
 左下隅黒四と二間拓するのは  
 古風です。然し今日でも行は  
 れる事は有ります。そして白  
 い若しくは(五)に對する應接は、  
 四が(六)の斜走の時と大差有  
 りません。  
 たゞ右下隅黒六と綽出した際  
 に違ひますが、白九の著理に  
 對しては黒十と下つて宜しい。  
 是だけを附加へて、四に就て  
 は略きます。



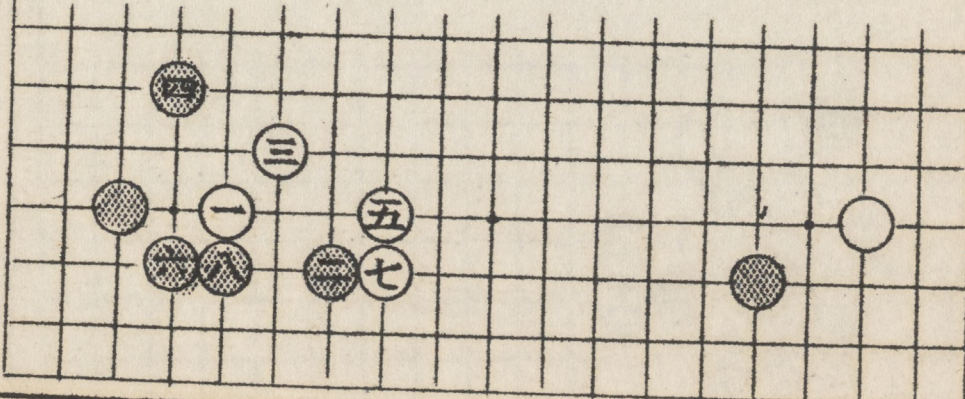




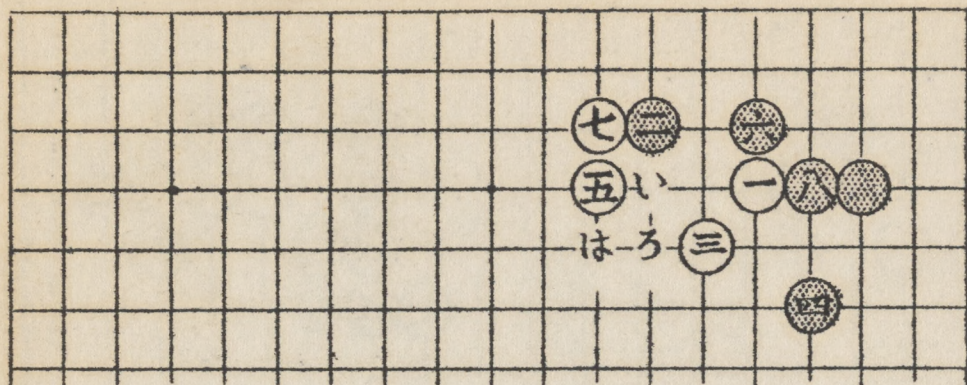




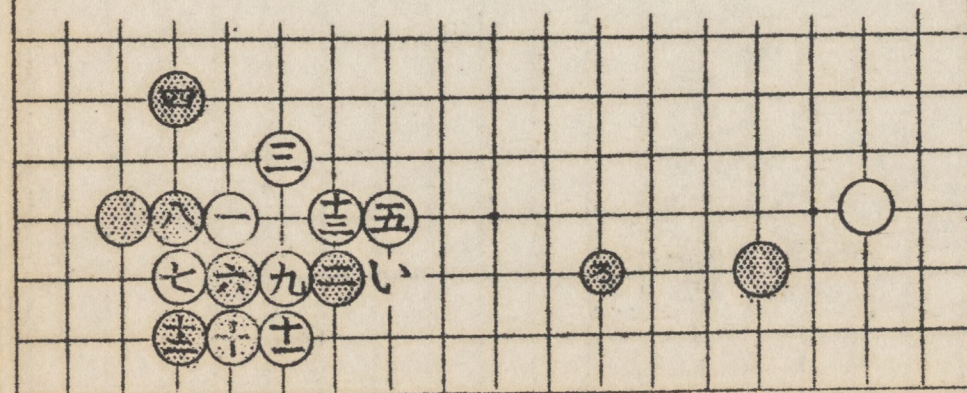
(第八十六圖)  
 白七と直に約込み  
 ました。黒八はこ  
 す。黒八はこの一  
 は、それで一本定  
 観られ、後、黒い  
 從つて白は適當の  
 位に一著備へる事  
 せう。後、白がほ  
 まほ、後、白がほ  
 れば、白○黒と白  
 ④の手段を生じま  
 ⑤の手段を生じま  
 ⑥の手段を生じま  
 ⑦の手段を生じま  
 ⑧の手段を生じま  
 ⑨の手段を生じま  
 ⑩の手段を生じま  
 ⑪の手段を生じま  
 ⑫の手段を生じま  
 ⑬の手段を生じま  
 ⑭の手段を生じま  
 ⑮の手段を生じま  
 ⑯の手段を生じま  
 ⑰の手段を生じま  
 ⑱の手段を生じま  
 ⑲の手段を生じま  
 ⑳の手段を生じま  
 ㉑の手段を生じま  
 ㉒の手段を生じま  
 ㉓の手段を生じま  
 ㉔の手段を生じま  
 ㉕の手段を生じま  
 ㉖の手段を生じま  
 ㉗の手段を生じま  
 ㉘の手段を生じま  
 ㉙の手段を生じま  
 ㉚の手段を生じま  
 ㉛の手段を生じま  
 ㉜の手段を生じま  
 ㉝の手段を生じま  
 ㉞の手段を生じま  
 ㉟の手段を生じま  
 ㊱の手段を生じま  
 ㊲の手段を生じま  
 ㊳の手段を生じま  
 ㊴の手段を生じま  
 ㊵の手段を生じま  
 ㊶の手段を生じま  
 ㊷の手段を生じま  
 ㊸の手段を生じま  
 ㊹の手段を生じま  
 ㊺の手段を生じま  
 ㊻の手段を生じま  
 ㊼の手段を生じま  
 ㊽の手段を生じま  
 ㊾の手段を生じま  
 ㊿の手段を生じま







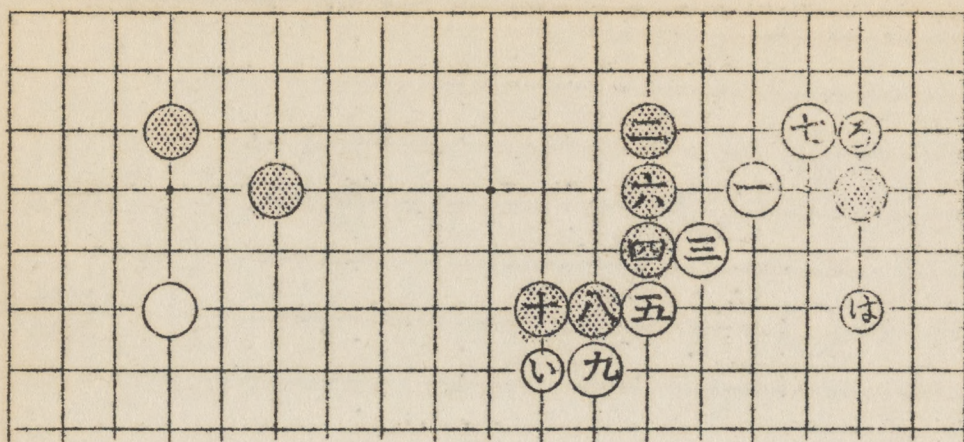
(第八十七圖)  
 黒六に對しては白七と約  
 込むのが正著です。  
 黒八の突張りに依つて、  
 前圖の如く白カウ頂越さ  
 れる缺點が失はれたと同  
 時に、黒い白ろ黒はの出  
 切りも無くなりました。  
 本圖は雙方共に堅固の構  
 へです。  
 左下隅白七と緯出すのは  
 宜しくない。  
 黒八以下十三迄の結果は  
 隅の實利を黒が収めた事  
 は言ふに及ばず、白の重  
 複した姿勢が面白くあり  
 ません。  
 十三をいに打つても同様  
 である。右下隅のこの配  
 置に於ては黒③と拓いて  
 充分です。



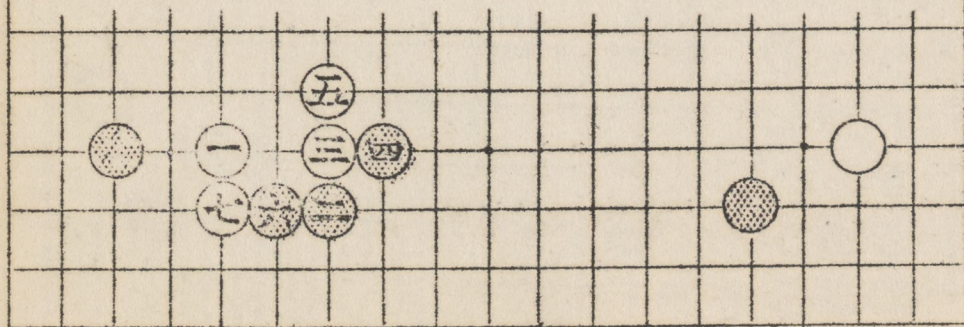




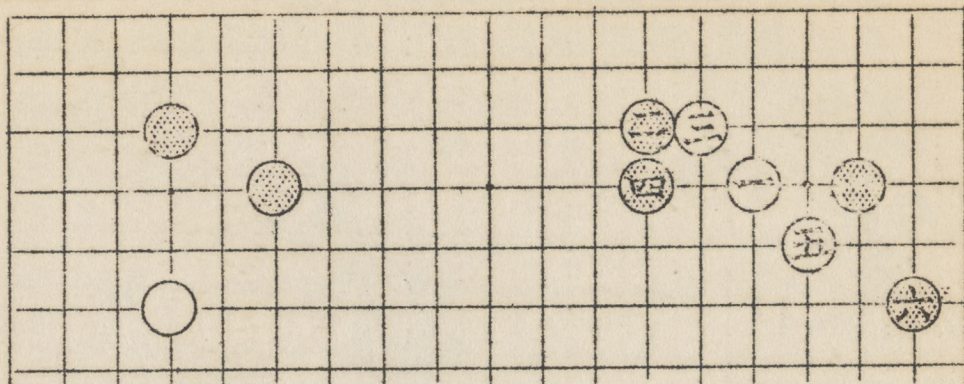




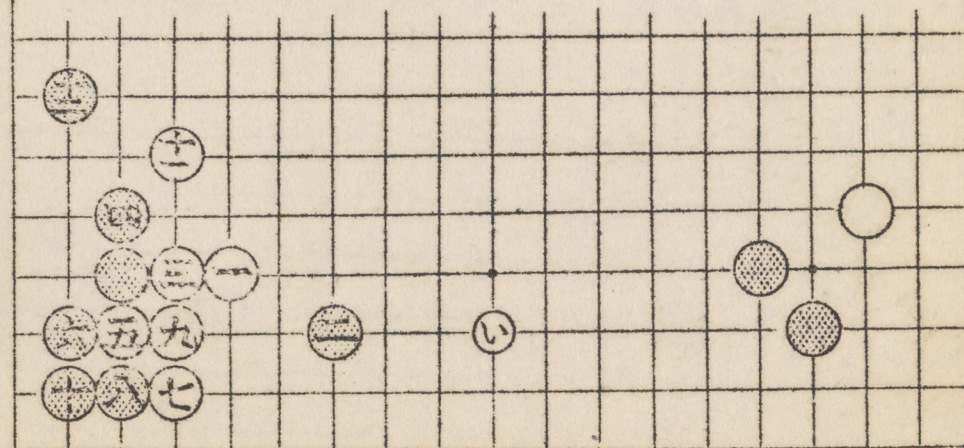
(第八十九圖)  
 白七と尖んで黒の盤を  
 効げました  
 黒八・十と縛行びて上辺  
 に雄大なる形勢を張り  
 ます。  
 定石としてはこれより  
 示されませんが、此處  
 だけを主として言へば、  
 次に白は①②③④等の中  
 を選んで打つ事になる  
 でせう。  
 左下隅白三と頂る事も  
 無いとは言へません。  
 これに對して黒四以下  
 白七迄となれば、初めに  
 白が一の年で七に掛  
 り、黒二・三・四・五  
 黒六・白一と打つ一問夾  
 定石に歸着します。



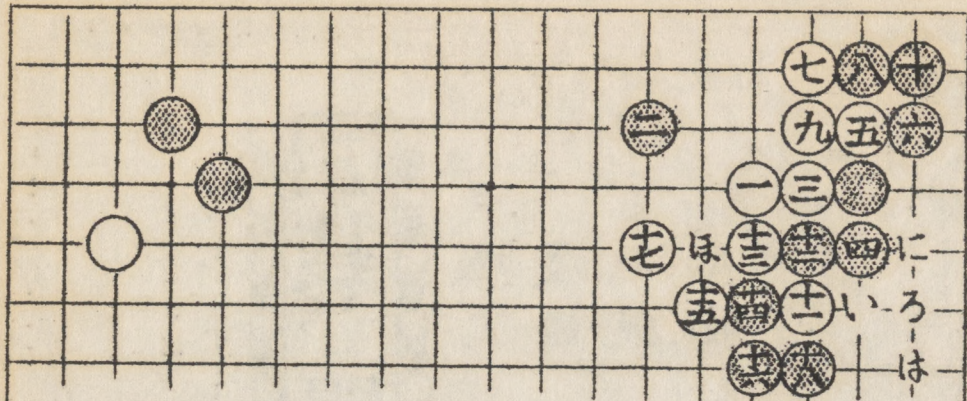




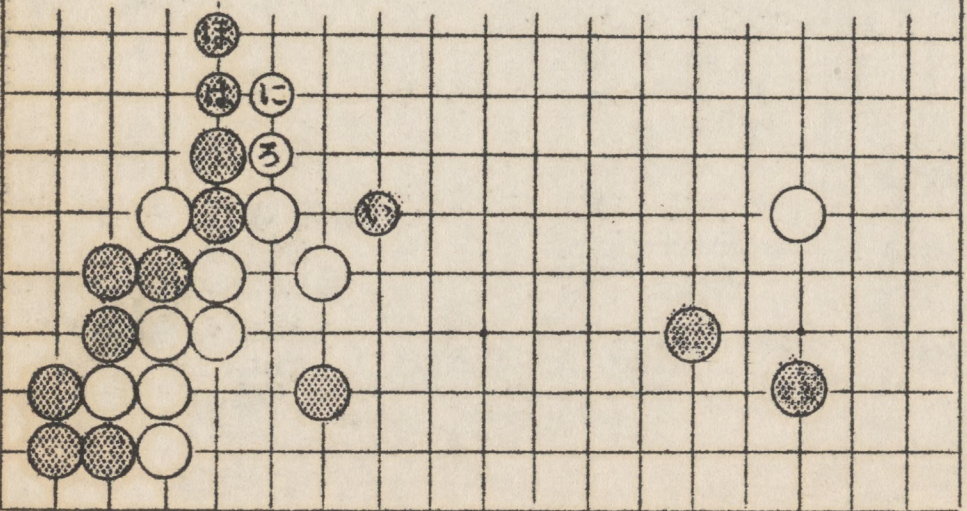
(第九十圖)  
 白三と尖頂け、更に五  
 と尖む型。既に先哲の  
 打碁にも現れました。  
 定石といふ譯ではない  
 が、参考までに掲げま  
 す。  
 左下隅白三と突當るの  
 も、古くかう行はれて  
 をり、今日でも往々用  
 ゐられる。黒四と引き、  
 白五と約へれば以下十  
 一迄は雙方必然です。  
 黒十二と走るのは多く  
 の場合、に於て、緩著たる  
 を免れません。次圖に  
 依る方が宜しい。白は  
 今度(イ)に夾む位でせう。  
 形勢に依るのだ(イ)とは  
 限らぬけれど、兎に角  
 下辺に夾撃して行く。



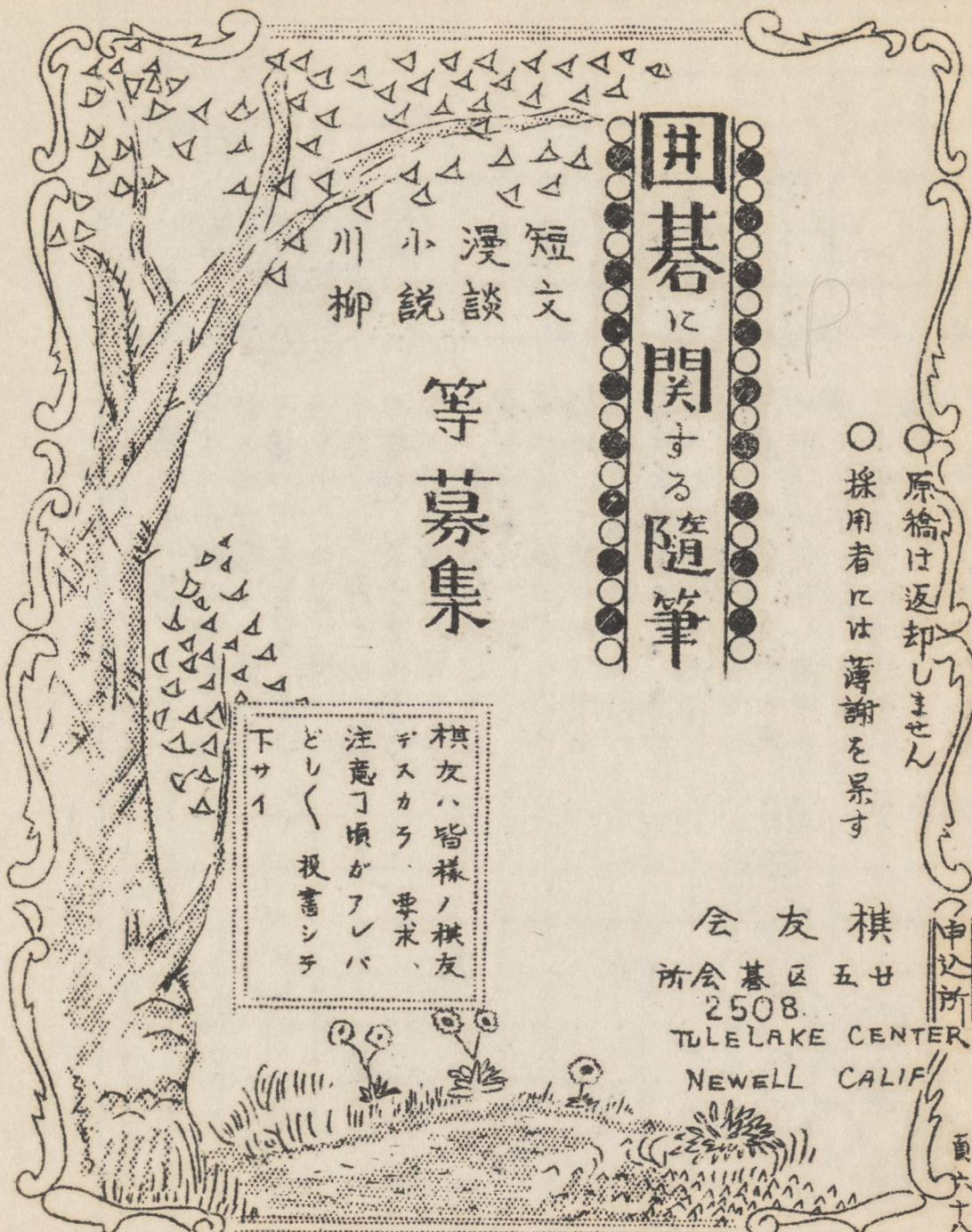




(第九十一圖)  
 黒十二、十四と弛まず出  
 切るのが最しい意味か  
 う優つてゐます。白十  
 五を十八の奥に引く  
 は黒十六と押されて白  
 の無理。又十五の守で  
 白がいに約込んだらう  
 ば、黒ろ白は黒にと縛  
 粘いて差支へ無いし、  
 或はにに粘がずに行  
 約込んで黒十六の打  
 利く奥を利用して打  
 事も出まそう。黒は  
 十八の奥で左下隅  
 打ち、白(三)に誘つて  
 (一)と行が、自然の調  
 子を以て左辺に地域を  
 圍ふ意匠も考へられ  
 論その有力なる場合も  
 有り得るでせう。







囲碁に関する随筆

短文  
漫談  
小説  
川柳

等募集

○原稿は返却しません  
○採用者には薄謝を呈す

棋友ハ皆様ノ棋友  
デスカラ、要求、  
注意丁領ガアレバ  
どしく、投書シテ  
下サイ

棋友会  
廿五區碁会所  
2508  
TULE LAKE CENTER  
NEWELL CALIF

申込所



# 碁人愚語

櫛形波生太

○ 棋道も茶道の如く一種の禮に始まり

○ 禮に終るものでなければならぬ。

○ 棋は徒らに変化をのみ尊しとする者

○ では無い。変化より來たる局面的

○ 推移を巧に捉へて早く大局を制する所にある。

○ 強さうで弱い入と、弱さうで強い人

○ とが有る、強さうで強ければ當然と

○ 見られ、弱さうで強いのが最も奥深い

○ ので有り、また願はしかるべき態度であり

○ ませう!!

○ 所が、吾々ザル碁はどうしても力量以上

○ に見せたがる自惚れがあるので、飛んだ耻

○ をかくことが多い。

○ 敵の石を一たび收めて、復た一たび

○ 放つ、三國志ぢやないが、孔明七た

○ び孟獲を擒にすといふような事も時に必要

○ であります。

○ 力の無いのに力の有る振りを見せて

○ も、直ぐ露はれるやうに、力に仕せて

○ て定石を無視するやうな者も亦、ひどいめ

に遭ふのは前者と同様である

○ 欲して止まるを知らざるは、其の

○ 欲する所以を失ひ、有して足るを

○ 知らざれば、其の有する所以を失ふと云

○ ふことがある。……棋道に於ても、

○ 厚さう云ふことが有る。

○ 大して必要もなき敵の石を、取り得る

○ がまゝに漫然と打ち抜いたりしてゐる中

○ は、最も關心を要する先着を敵に占めら

○ れて、取り返しに附かぬ羽目に陥るもの

○ であります。

○ 攻撃的守勢と守勢的攻撃とは多少

○ ちがふ。前者はいはゆる烈しい碁

○ で、後者は温しい碁である。

○ 前者は攻撃を鉄則とし、後者は守勢を

○ 鉄則とするもので有るが、其のいづれも

○ が極端になれば矢張り其處に或種の破綻

○ を招来する。だから、攻勢、即ち守勢、

○ 守勢、即ち攻勢の眞の妙境に達して始め

○ て兩者共に其の棋風は相進して居ても力

○ 量は伯仲の間に在るといふことになる訳

○ であらうと思ふ。

○ 初對面の棋に於いて、負けると直

○ ぐに止す入がある。又勝つても直



に物色する者もある。

前者は連敗の豫想的恐怖？におびえ、後者は第二局面に於いて最初の勝利を無効なしめざらんとする希望と共に優越感を永久に保有せんとするからで有らう。然しながら、大体に於て勝てば四局まで連続するも負ければ二回又は三回ほどにて中止する人が多い。

依是觀之、勝敗が一部の棋人に取つて如何に大なる關心事なるかを知らに足るであらう！

○ 碁は初段に二三目といふところが、最も油断を起し易い時期であらう。俺も一寸打てるぞとそんな氣が起つたが最進歩は止まつて了まふらしい。所が初段となると妙なもので却つて自己の缺點が分つて來て希望も増してくるから比較的慢心が少くなるやうである。

○ 専門家の碁は、常に能く「後味」を考慮して、手を打つことを保留するが、あれが吾々には却り出來ない。

○ 困碁の進境は着眼點の變化に基く。そして其の着眼點の變化は新たななる發見に由らなければならぬもので有らう。碁は或程度まで行くと、それから先きは

容易に進境せぬ不思議な藝術である。

素人免狀も取れぬ筆者などが免や角云ふのは烏滸の沙汰で有るけれども、さて、専門家が一度進境が止り出したら仲々歩らないのは餘りにも當然過ぎる譯であらうと思ふ。而かも反つて専門家の進境著しき者に在つては、実に跋くべき人々が有る。棋才と云つてしまへばそれまでだが、其の進境に費したる努力の経過を惜みなく發表されたならば、ど礼程、後進者は勿論、素人棋も又大に得る所があるんぢやないかと愚考するが、これは、却りむづかしい問題で、濡れ手に粟、他人の禪で相撲をとやうな虫の好い事ばかり考へるやうな習慣になつても始まらない譯合で、結局何もかも自發的に勉強しなければならぬものらしい。

○ 油断より生ずる蹉跌と、勝を急ぐ焦燥と、目算のみに因はれて好機を逸する苟安等々、皆これ棋道に於ける眞の修養を怠る結果に外ならない。

○ 専門家が技能の行き詰りを感じずるぐらひ辛いことは有るまい。



## 秀榮と殿様の懸賞(時代明治)

本因坊秀榮氏は明治の人で、今日の棋院  
あちの圓基が一般的に普及されたのも彼氏の  
努力の賜と云へますでせう。明治三十八年  
八月に創立した日本囲碁会の第一回の会長  
になられた人で、逸事を記して見ませう。

### 秀榮

は嘗て某華族邸へ稽古に行つてゐ  
た事があつた。その華族家の三太  
夫はよほど世情に暗い人と見えて碁打の  
誰が行つても包金は薄謝二百足(五十錢)と  
きまつてゐたものだ。名人秀榮でさへも  
御多分に洩れず、何時も謝金は二百足を  
出でなかつた。されば召狀が到來すると  
「さては二百足のお邸かし」

と當時碁打仲間では、なか／＼有名  
なものだつた。

或時殿様が秀榮に向つて、

「如何に名人でも、予が聖因を置いたな  
らば、決して負かす事は出来まい。

萬一予が負けたらば、この煙草入を懸  
賞にしようではないか。……ドウぢやし  
と云ふ大麥鼻息の荒い御意であつた。

秀榮は腹の中でフ、ンと哂笑つて、

「仰せの趣き畏りました。兎も角聖

目をお願ひしませう」

平生は六目或は五目で稽古をしたので  
あるから、聖目ならば決して負けまい  
と思はれるのは殿様として決して無理  
のない話だ。所が二局打つて二局とも

案に相逆して惨敗して終つた。  
さすが自信の強い殿様も、呆氣に取

られて甚だ不興氣であつた。  
秀榮は遠慮會辭もあらばこそ、日頃

薄謝二百足の謝儀を齎らすは、この時  
と思つて、

「仰せの通りこのお煙草入を頂戴致  
します」

その煙草入と云ふのは古渡り珊瑚の緒  
メに純金の煙管で、價格は凡そ五百金

ぐらゐのものであつたとか。  
秀榮はその煙草入を腰にさして、蠅

々と歸つて了つた。  
が彼の三大夫が此度取返しに来るだ

らうと思つてゐると、果してその翌朝  
三太夫が慌しく乗込んで來て顔色を變

へて云はる、よう、  
「其の許は昨夜、殿のお煙草入を持

て云はる、よう、



ち帰られたさうでござるナ

「ハイ、頂戴して参りました」

「鬚賞云々は殿がお戯れに仰せられた事でござる。よしんば勝つたからとて殿の御手前一應拜領するは宜しうござるが平生の御恩を思へば其許が滞りしなに、そつと拙者の手許へ戻すべきではござらんか……それを真に受けて持ち帰られたとは不埒至極であらぞ。早速返却して然るべう存する」

とブンブン怒つてゐる。秀榮は冷然として、……「私は然るべう存じません、併しそれは殿様の御意でありますか、或は貴公の御一存でお取戻しに参られたのでありますか？」

「勿論殿の仰せではござらん。併し殿が戯れに仰せられた事を、拙者共が看過いたすのは臣下の道ではござらん。

拙者の一存で取戻しに参つた次第で秀榮はへ、エ、御恩、二百疋、何の御恩ぞ」と心の中で囁きながら儼然として

桐葉を以つて、その弟御の叔虞を封ぜられた古例もあるではありませんか。我が朝に於ては武士に二言なしとは封

建武士の誇りとした武士道であります一旦殿様が仰せられたお約束を、貴公等が勝手に反古にせらるゝと云ふことは、三太夫たる者の作法でありますか況や五百金、千金は我々に取つてこそ大金なれ、殿様の御身分ではお戯れ事としてふさはしき金高ではありませんか。今更らそれを御返却申上げると云ふ事は、却つて失礼でありますから折角の御来意ではありますが、これは御返し申す事は出来ません。」

ときつぱり断つて了つたと云ふ。

この事を聞傳へて二百疋組の甚客は快哉を叫ぶる者なく、一夕相集つて心ばかりの配宴を催ほして日頃の溜飲を下げたとは秀榮師の直話。

題は隨意

千五百字句内外

漫談カ  
小説  
イ

井 甚 短 文 募 集

投稿繰切リ毎月三十五日迄

採用者には薄謝を果す



# 棋士銘々傳



經歷と申しまして、別段取立て、お話しするほど、立派な事柄もなく、御期待に添ふ何物も有りませんが、生れましたのは、萬歳の故郷として、木綿の産地として、それから幕府時代には権現様発祥の地として知られた三河です。尚ほ詳しく申せば碧海郡刈谷町は境川の片ほとりて父甚吉と母さじとの間に、明治十六年五月廿四日の朝、晴の尾を切つたのです。父は七十九才で母は八十三才で歿しましたが、何さま五十年前の幼い時のことは、大抵記憶を失いました。が何でも物ごゝろ覚えたいたいけ盛りに町内の若い衆が寄つて、所謂縁台将棋を指すのを見て誰にをそはつたといふでもなく、いつしか駒の相道を覚えて、間もなく若い衆の仲にはいて、勝負を争ふやうになりました。

## 八段 鈴木爲次郎

(戦後八段に昇段されました)



たスルト今度は父の手ほときで碁盤に向ひ、四ツ目殺しからシテウや、追落しなどの面白味を覚えしたのでいつとなしに将棋から碁の方に轉向したので、それがたしか十一ぐらひの時でした。

やはり父よりは強くなり、近所の笹仲間にも恐れられるやうになり、子供心にも手に立つ相手が欲しくなり、其の頃隣村小山の傳通院と申す浄土寺の和尚が界限での打ち人でしたから、能く此の寺へ遊びに行つては和尚を稽古台に採んで貰つて居たのですが、程なく和尚も白が持ちきれず、負けると茹で蛸のやうになつて、フウク言ひのが何よりも面白かつたのです。テハ此の和尚がどれ程の打ち人かと言ふに、ソコは田舎のことですからお話しにならないへ碁な



のです、今其の估券を定める一例を挙げて見ますと……當時縣下知多郡龜嶺……

只今半田市に併合された處ですが、其處に中山五郎左衛門と云ふ初段の實力があると云はれる碁打がありました、傳通院の和尙は中山に五目置くのですから、落々今の五六級と云ふ所です、此の中山には滑楯の神話が残して居ります。時は明治廿四年頃の事と聞きました、東京から何か觀察の用務を帯びて愛知縣に出張し、龜嶺の某旅館に投宿して一人の官吏が「オイ御亭主此の邊に碁の強い者は居ないか」と尋ね、亭主は半ば郷土の自慢の意味で中山の腕前を説き「是れは如何なる廻國の修業者が参りましたも勝つて帰つた例しがござりませぬ、」云々それは耳寄ぢや、デハ妨げなくばこれまで来て貰ふやうに頼んで呉れまいか、亭主は早速其の旨をふくんで中山の許へ出掛けました。

中山も東京のさる官員様のお招きと云ふのに稍や誇りを持ち、直ぐ様衣服を更めて亭主と一緒にやつて来たのです。

待ちかねた客は挨拶もそこ／＼に設けた盤に對ひ「あなたは初段の力がある」と伺ひますが、まあ四つばかりで願ひませう」と

斯う切り出したのださうです、ト中山はすこぶる謙遜の口調で「イエ、減相な、其は逆も打ちきれませんが、とにかく初めてのお手合ですから桐みでお願ひ致しませう」と申しますと、客は一寸氣の毒さうな思ひいれで「イヤ言葉が足りませんでしたが、あなたに四目置いて戴かうといふのです」意外も意外、此の主客顛倒の高飛車を食つて中山も一時ムツとしたもの、よし其の儀ならは一泡吹かした上、後で脂を絞つてやらといふつもりで言ふ通り四目布いて對局に及びましたが、客の着手はなかく悔りがたく、第一局は五六十手で潰れて終いました。ソコで第二局は五目、第三局は六目を布いて戦ひましたが、脆くも皆な中押で片付けられたので、中山も這々のいで引きさがつたのです。さて之れが忽ち評判となつて中山の高慢を懲す爲め、天狗が客に化けて来たのだらうと、途方もないデマさへ飛んだのでしたが、後で段々客の素性を質して見ますと、何んと之が當時外務省在勤の内垣末吉五段だつたさうです。

さう云たやうな環境にはぐくまれた私は中山なにがしを學んで鳥なき里の蝙蝠となら



うとも思ひませんでしたから、豊橋の棋士  
福田銀次郎四段に六目の稽古で精や自信を  
得ましたのは十六才ぐらゐでした、が中等  
教育を受けて居ませんので東京へ遊学を志  
し、十七の時上京して小石川の京北中学に  
入学した爲め、暫く基と遠ざかつて居まし  
た。其の中国許から上京した友人が私の神  
田の下宿へ尋ねて来て同宿して居ます中に  
友人も基が好きだもんですから、一日伴れ  
立って淡路町の暮会所に遊びに行きました  
席主と云ふのは白鬚を蓄へた、如何さま  
有段者でもあるやうな客子の考人でした。

『どの位お打ちになりますか』と尋ねるの  
で『まあ段に四五目のところでせう』では失  
禮だが四目お置きなさい』といふので、やつ  
て見ると席主の石は殆んど全滅といふ有様  
でした。スルト走入開き直つて羽たし井で  
は賭碁は絶対に許さない、堅いので評判を  
取つて居る基席だからね、君達のやうに手を  
隠して来る客は相手にできない』と、剣もほ  
ろゝの尖り方に、言盡するも面倒でしたか  
ら其れきり其處へは行きませんでした。

其れが動機になりていつそ碁を打つなら  
も少し垢抜けした碁を打ちたいものだ、と、  
それから方圓社長岩崎健造八段の下谷御徒

士町の塾へ出かけて最初は井目で稽古をし  
貰ひました。故岩佐銈君なども其處に居て  
岩佐君には七目で打つて貰ひました。

それが又偶然にも、岩崎八段にも岩佐君  
にも勝てたものですから、ナニ此の分なら  
といふ氣持になつて、今度は麹町の廣瀬さ  
ん……七段の塾に出かけて六目で打つて貰  
ひました、所がこれは数日にやつてられて  
おまけにえらいお小言を食つた上、碁を打  
つ心得方に就いての説法を受けましたので  
其の垢抜の域まで達するには相當の苦心を  
要すると言ふことが判りました。彼此する  
中に中学を卒へましたので、今度は一つ組  
織的に碁を研究して見ようと思ひまして、  
岩崎八段の塾に通つて半年もしますと、岩  
崎先生から通学よりいづそ它へ来て内弟  
子生活をしてはどうかとの勧めが有りまし  
たので、是れ幸ひと早速下宿を引持つて塾  
生の仲間入をしました、が其れから一ヶ年  
ばかりすると、徵兵通齡の關係で國に帰ら  
なければならぬ事が起りました、で先生の  
許からお暇を戴く時に、方圓社の三級初段  
と云ふ唯今で申せば一級の、初段に先の資  
格を認められた免狀を貰つて故郷へ帰り取



敢ず一年志願兵として義務だけを果しました、それから兵役を終ると其の武者修業に出る計畫を樹てたのですが、其れと云ふのも當時の免状は實力よりも郷して低くなつて居たもので、三級初段でも田舎へ行けば優に三段で通れたものですから、半ば放浪的の廻國を思ひ立つたのです。

其の時はまだ佐市といふ弟があつたものですから、家督を之れに譲る考へで飄然として故郷を立ち名古屋では高崎泰策六段と先二の手合で二番打ち、大阪では阿部龜次郎五と先で打ち、神戸では田淵因碩と先で打ち、其れから泉秀節五段の息子で喜一郎といふ人と互先で打ちましたが、之は立派の三段で大いに前途を展望されて居た青年でした。が惜しむ哉若死にを致しました。そんな風に悠々京阪を経て中国路に出で、やがて九州路へ渡つて各地を遊歴する間に三四年の月日を放に暮して、いつしか廿五歳の春を迎へましたので、そろ／＼家庭を作る準備もしなくてはならずと、そんな責任感に唆られて東京に帰り、方圓社に岩端先生をお訪ねして、試験の意味で久々の對局を願ひました、スルト程なく三段の免状

授けられましたから、初段二段の過程は試験でパスしたわけなのです、是より先遊歴中或人の催しで、故野澤竹朝君と私の對局が、それは終に實現しませんでした。今度上京するとやはり私と野澤との對局が藤村雄次と云ふ方に依つて計畫されました。此の人は當時の棋界の爲めに何くれと盡力され、且つ非常に人格の立派な方でしたから、一般棋士から殆ど絶對の尊敬を蒙り、例へば井上孝平五段が其の次男に推次と名付けたのも、藤村さんにあやかるやうにといふ意味だつたと思ひます。

ソコでいよく、私と野澤と打つことになつて日取も場所も定まり、いざ手合となつて盤に對ひますと、野澤が手合割をどうするかと尋ねますので、是までづつと三段格で通つて居ますから、先相先で打うと答へますと、當時野澤は四段私はまだ方圓社の免状は持ちませんでした。が、三段の自信は有りましたからさう言つたのでした、スルト野澤は急につもじを曲げて、竹朝未熟と雖も無段の棋士と先相先で打つわけには行かぬと言ひ出して、挺でも動かないのです、主催者の藤村さんも言葉を盡して竹朝の辭意



を説得しましたが、あゝ、いかに一徹の人でしたから到底妥協が出来ず、双方碁盤を睨んだまま、物別れとなつて了ひました。

其の後私が三段の免状を受けてから、野澤と萬朝報の新聞碁を打つたのが、抑も野澤と私の初手合でした、其の頃の新聞で碁に力を入れて居たのは、時事新報と萬朝社との二社で、時事新報は本因坊派と方圓社派と分けて掲載し、萬朝報は綜合的の手合を載せて居たのですが此の萬朝の野澤との手合は、勿論段割でしたから先相先でやりました、所が私の方が棋運拙くして結局先二まで打込まれたのです。といふのも野澤が卓越の技倆を具へて居たからではあります、彼れのおを衝いて出る善黨に太刀打ができなかつたのも一つの誘因となつたでせう、斯う言ひますと何が負惜みの愚痴のやうにも聞えますが、此の善黨に長じたのが彼れの一つの武器でもあつたかと思はれます。

斯くして野澤との手合は、私の身上の變化やら、何やらで、其れぎり中絶してアつたのですが私が七段になつてから昭和二年でしたか、讀賣新聞の主催に係る日本棋院

對棋正社の競争試合に於て、關土に乏しい棋正社の陣容が振はない所から、讀賣は震災後神戸に轉住して居た野澤を迎へて棋正社側に加へ、そして私との十番碁を計畫したのです、其の條件として手合中野澤を七段として認める事、私と野澤の從來の成績を一擲して、新たに互先の掴みで対局すること、いふので、茲に七段同志の十番碁が開如されたのでした、デ初め一二回は無事に進行したのですが、やがて野澤が病氣となつてとかく手合が停滞し勝になり、おまけに彼自身の口から掩の病氣は肺病だ、と吹聴するものですから、たとひそれが一流の磊落を裝ふ無邪氣の吹聴にもせよ、何だか身近に對局するのは快くないので、棋院を通じて無期延期の申込みをしたのです、ト野澤も悪かつたと氣がついたものか肺結核でないといふ主治醫の診断書など提出して、手合の繼續を主張するものですが、私は更に手合を繼續するならば對局中マスクを用ひるが、然らざれば室を隔て、對局したいと申込みました、野澤が其の何れを取るが待つて居りますと、マスクを懸けるなんてそんな窮屈の事は眞平だ、デハ室を隔て、打つことにしようといふので、







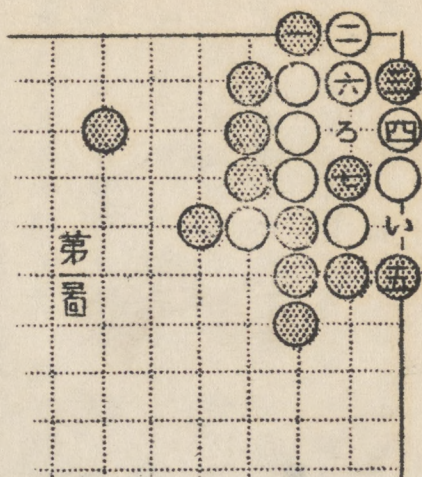
常に現れる

# 詰碁

隅の死活

第三号

解説



第一番

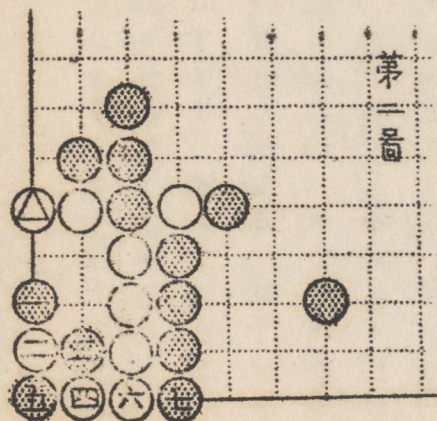
## 第一番

本番に於ける攻畧の順序は、黒一と緯ねて、白二と約へれば三と置き、そして白四と突張る時、五と下るのが旨い手順なのです。白六と眼を持つても黒七と打缺けば、残念ながら(五)と粘ぐわけに行かず(三)と取りても(五)と眼を缺いで、白は其のまゝ全滅と云ふわけですから、黒一は死は緯に在り」と云ふ標語の通り、白の懷を狭くする意味に當り、黒三は「二」の妙手ありのスロガンを如実に決行した手に當るのです。

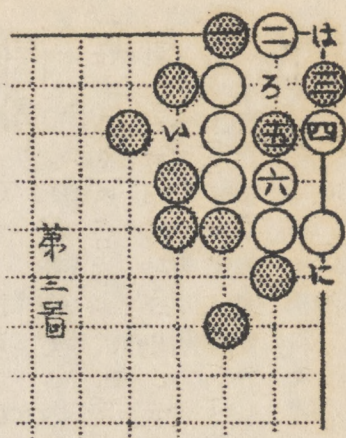
## 第三番

本番は前番と比較し△印の位置が進みだけのもの、で、前番の△印が掛粘の場合は無條件に死にますので本番の如く懷を廣くする意味で正着な運びと云はねばならぬ。文は黒先で一と置けば以下七まで劫となるのですから其の成敗は何れか劫材の豊富な方に恵まれるのです。前番に於ける無條件に死すより本番は教等優りておます。尤も黒一の手で六に緯ね白四の時黒二と置いても劫死となるのですが本番の如くダメの詰んで居る場合は黒一と

第三番







第三番

置くのが有利であります。

第三番

本番は(い)の夾に駄目のある夾が前番との相違点です。黒一と緯ねて白二の時三と置きそして、白四黒五白六と運んで劫となるのです。黒若し一で四に置けば、白三に頂け、黒(三)と割り込む時白五に切り、黒(五)と取り、白一に下り、黒(五)なら白二で、やすやす活るのです。

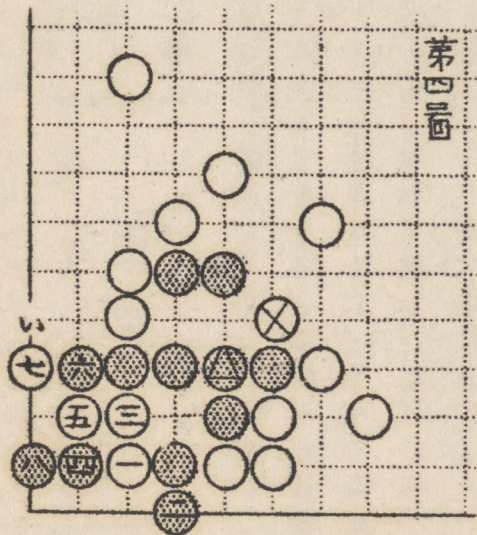
ることが、白に取りて唯一の強味となるのですから、黒は之れを前番と混同せず、外ゲメの有無を頭に置いて誤りなき處置を採らねばなりません。

第四番

本番に於て白一と隅の黒を攻めか、つた時、黒の受け方ですが、黒二と下るのは

當然たる應手ですが、次に白三と突張る時、黒四と頂けるのが緊要の手筋、此の一手で死中に活を得るのです、斯くて白五と曲り、黒六と約へ、白七と緯る時、黒八と下るのが、所謂「三」の妙用に當るのです。若し此の急所を逸して(い)と約へると劫となります。本番は對局上最も多く現はれる、頂手定石の一変化で△印と黒△印の交換あるため白一と頂ける手がないのです。

第四番

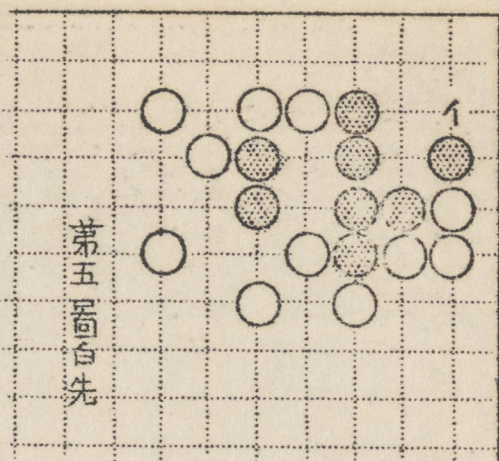




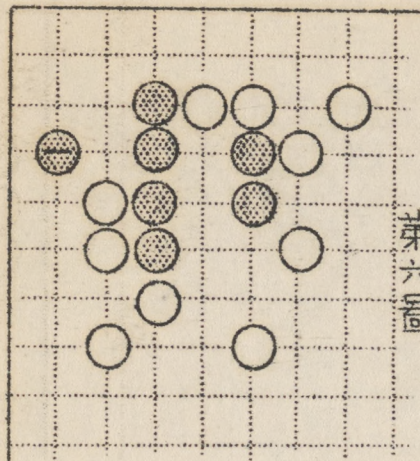
常に現れる

## 詰碁問題

隅の死活



第五番白先



第六番

### 第五番

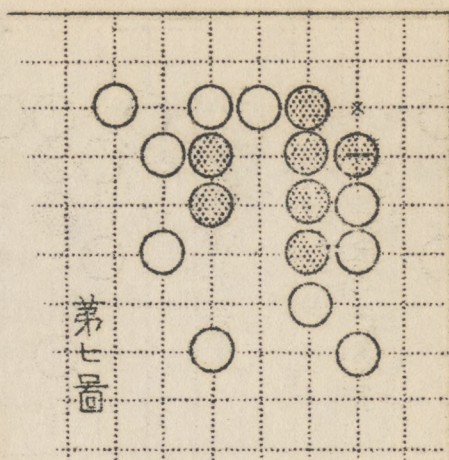
前番(一)月号に於て(イ)と頂け白が迫った時、黒は本号で解説を試みた如く完全に活きられ其の目的を達せず終りましたのです、依つて白(イ)と頂けず此の隅に迫る他の手法があるでせうか？斯く堅障を以てする時、黒には到底活路は無いので気度初學者には難題かも知りませんが、よく研究あらん事を乞ふ。

### 第六番

本番に於て黒が此の隅を活きんとせば、本番の黒一と恥ぶのが正しいか又次番の黒一と約へるのが正しいか、両番を掲載し、参考に供しませうが本番の結果は白先で黒に活道無しですから、黒一の失着を如何に咎むべきでせうか？

(詰碁に出會ふと多くの人は自分一人で早合點して、自分一人で殺し、一人で活かしてゐます。変化は多岐多様にあるのですから、よく研究して実力養成に努力あらん事を乞ふ。

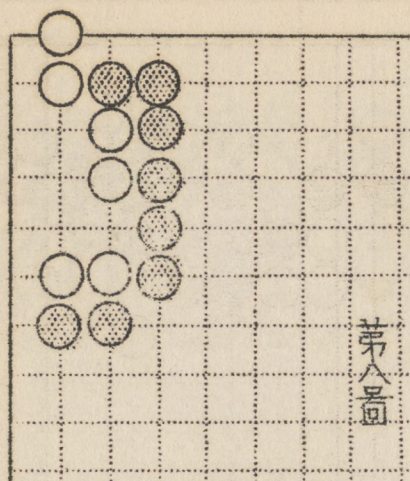




第七圖

第七圖

本圖に於ける黒一と約へた場合に白先で如何なる手段があるかと云ふ問題なのです。前圖に於ける黒一の形は形にして良着なるかの様に見へますが大失着で第六圖は無條件死となるのです。依つて、本圖の黒一と約へるのは×印に穴三角の愚形を形づくるのですが隅に於て一合榊の形となり、白より如何に強襲を加へるとも無條件には黒は死なないのです。では其の手續変化を試みて下さい。



第八圖

第八圖

本圖に於て、白の構へは、一見甚だ堅固のやうで、もう黒から別に指を染むべき、餘地も無さそうですが、此の白決して此のまゝ晏如たるわけには行かないのです。と云ふのは黒先で急所を衝かれたが最後、白はその一矢で即死と云ふことになるのです。では、黒は何處から迫るべきでせうか



25

18

10-30



棋友會